

上田市文化財調査報告書第26集

# 五反田遺跡

五反田遺跡他遺跡緊急発堀調査報告書

五反田遺跡

堰口ノ一遺跡

西紺屋村遺跡

滝沢遺跡

金井遺跡

上田市教育委員会  
東信土地改良事務所

上田市文化財調査報告書第26集

# 五反田遺跡

五反田遺跡他遺跡緊急発堀調査報告書

五反田遺跡

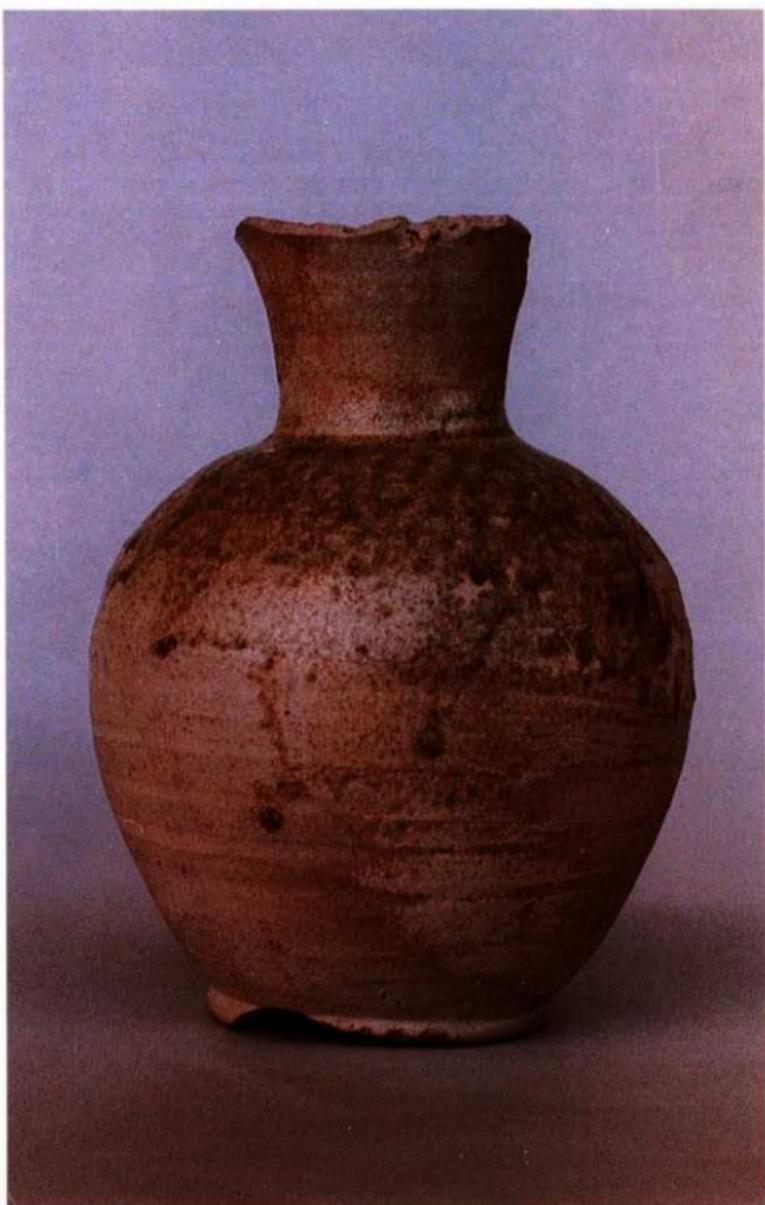
堰口ノ一遺跡

西紺屋村遺跡

滝沢遺跡

金井遺跡

上田市教育委員会  
東信土地改良事務所



壇口ノ一遺跡C地点出土の灰釉長頸瓶

## 序

上田市手塚地区は古くから開発され、人々が居住していた地域です。このため市の史跡に指定されている皇子塚古墳をはじめとして、原始古代の遺跡が数多く存在しております。

このたび塩田西部地区の県営圃場整備事業が手塚地区で実施され、これに伴なって事前に五反田遺跡、堰口ノ一遺跡、西紺屋村遺跡、金井遺跡、滝沢遺跡の5遺跡の発掘調査が実施されました。

発掘調査は調査団長に別所小学校の岩佐先生、副団長に上田女子短大の塙入先生をお願いして、夏の猛暑のさ中、7月下旬より10月4日迄実施されました。

その結果、縄文から平安時代にかけての竪穴住居跡や掘立柱建物址の遺構が検出されました。また縄文式土器や弥生時代後期の箱清水式土器片、平安時代の土師器片や須恵器片などの遺物が多数出土しました。殊に堰口ノ一遺跡C地点からは長頸瓶が出土し、極めて貴重な発見とされました。

今回の調査にご尽力いただいた顧問の黒坂先生をはじめとする調査団の諸先生方、調査にご協力をありがとうございました地元の手塚自治会の皆さん、並びに圃場整備にあたられた長野県東信土地改良事務所の関係者の方々に衷心より厚く感謝申し上げる次第であります。

昭和61年3月

上田市教育長 櫻井 廣男

## 例　　言

1. 本書は、塩田西部地区県営圃場整備事業の着工に先立ち記録保存を目的として、上田市手塚に所在する五反田遺跡、堰口ノ一遺跡、西紺屋村遺跡、滝沢遺跡、金井遺跡を対象に実施された緊急発掘調査の報告書である。現場における調査は、昭和60年7月29日から10月4日にわたり行われた。
2. 発掘調査は、東信土地改良事務所の依頼を受けて、上田市教育委員会が主体となり国庫補助事業として行った。現場調査は五反田遺跡他発掘調査団に事業委託して実施された。
3. 遺構実測は、塩入秀敏、倉沢正幸、中沢徳士、塩崎幸夫、西川和恵、西香子が行い、遺構写真の撮影は、中沢、塩崎が担当した。また、遺物実測、拓本及びトレースは、原則として執筆者が行い、西川、石井弘子の協力を得た。遺物写真は、塩入、倉沢、塩崎が撮影した。
4. 本書の執筆分担は次の通りである。

第1章	.....	塩入秀敏
第2章	.....	事務局
第3章 第1節	.....	岩佐今朝人
第2節	.....	塩入秀敏、中沢徳士、塩崎幸夫
第3節	.....	塩入秀敏
第4節	.....	塩入秀敏
第4章	.....	塩入秀敏

5. 本書の編集は、調査団の協議に基づき塩入、倉沢が行った。
6. 本調査に関わる遺物、実測図、写真などは全て上田市教育委員会が保管している。
7. 本書が上梓されるまでには多くの方々、諸機関よりご指導ご協力を頂いた。特に、森嶋 稔、川上 元両氏よりはご助言を賜り、翠川泰弘、尾見智志両氏には現場において多大なご協力をいただいた。また、地元手塚区は作業員確保のために区をあげてご協力頂き、その結果、殆ど全戸にわたる皆さんが交代でご出勤下さり、炎暑のなか作業に従事された。記して感謝申し上げたい。このほか、東信土地改良事務所、地元工事委員会、上田市教育委員会のご理解ご協力にも、敬意と感謝の意を表したい。

# 目 次

序

例 言

第1章 環境

第1節 自然的環境.....	1
第2節 歴史的環境.....	3

第2章 調査に至る経過

第1節 調査に至る経過.....	5
第2節 調査団編成.....	5

第3章 調査

第1節 五反田遺跡の調査.....	7
第2節 堀口ノ一遺跡の調査	

I 調査日誌.....	15
II A地点の調査.....	18
III B地点の調査.....	28
IV C地点の調査.....	35
V D地点の調査.....	44

第3節 西船屋村遺跡の調査.....	57
--------------------	----

第4節 鳴沢・金井遺跡の調査.....	59
---------------------	----

第4章 まとめ.....	60
--------------	----

図版.....	65
---------	----

あとがき

## 挿 図 目 次

第1図	2
第2図	8
第3図	9
第4図	11
第5図	12
第6図	13
第7図 墓口ノ一遺跡A地点全測図	17
第8図 墓口ノ一遺跡A地点第1号住居址 (SB01) 実測図	18
第9図 墓口ノ一遺跡A地点第1号掘建柱建物址 (SB02) 実測図	19
第10図 墓口ノ一遺跡A地点第2号掘建柱建物址 (SB03) 実測図	20
第11図 墓口ノ一遺跡A地点第25号土壙 (SK25) 実測図	21
第12図 墓口ノ一遺跡A地点出土遺物	22
第13図 墓口ノ一遺跡A地点出土遺物	23
第14図 墓口ノ一遺跡A地点出土遺物	25
第15図 墓口ノ一遺跡B地点第1号掘建柱建物址 (SB01) 実測図	27
第16図 墓口ノ一遺跡B地点第2号掘建柱建物址 (SB02) 実測図	28
第17図 墓口ノ一遺跡B地点全測図	折り込み
第18図 墓口ノ一遺跡B地点出土遺物実測図	32
第19図 墓口ノ一遺跡B地点出土遺物実測図	33
第20図 墓口ノ一遺跡C地点全測図	36
第21図 墓口ノ一遺跡C地点第1号土壙 (SK01) 実測図	37
第22図 墓口ノ一遺跡C地点第12・13号土壙 (SK12・13) 実測図	38
第23図 墓口ノ一遺跡C地点出土遺物実測図	40
第24図 墓口ノ一遺跡C地点出土遺物実測図	41
第25図 墓口ノ一遺跡D地点全測図	45
第26図 墓口ノ一遺跡D地点第1・2・3号住居址 (SB01・02・03) 第2号土壙 (SK02) 実測図	47
第27図 墓口ノ一遺跡D地点第3・4・6・12・13号 (SK03・04・06・12・13) 実測図	48
第28図 墓口ノ一遺跡D地点出土遺物実測図	53
第29図 墓口ノ一遺跡D地点出土遺物実測図	54

第30図	堰口ノ一遺跡D地点出土遺物実測図	55
第31図	西緑屋村遺跡出土遺物実測図	57
第32図	淹沢・金井遺跡土層断面図	58

## 図 版 目 次

第1図版	五反田遺跡の調査	67
第2図版	堰口ノ一遺跡A地点の調査	68
第3図版	堰口ノ一遺跡A地点の調査	69
第4図版	堰口ノ一遺跡A・B地点の調査	70
第5図版	堰口ノ一遺跡C地点の調査	71
第6図版	堰口ノ一遺跡C地点の調査	72
第7図版	堰口ノ一遺跡C地点の調査	73
第8図版	堰口ノ一遺跡D地点の調査	74
第9図版	堰口ノ一遺跡D地点の調査	75
第10図版	堰口ノ一遺跡D地点の調査	76
第11図版	五反田遺跡出土遺物	77
第12図版	五反田遺跡出土遺物	78
第13図版	堰口ノ一遺跡A地点出土遺物	79
第14図版	堰口ノ一遺跡A地点出土遺物	80
第15図版	堰口ノ一遺跡B地点出土遺物	81
第16図版	堰口ノ一遺跡B地点出土遺物	82
第17図版	堰口ノ一遺跡C地点出土遺物	83
第18図版	堰口ノ一遺跡C地点出土遺物	84
第19図版	堰口ノ一遺跡D地点出土遺物	85
第20図版	堰口ノ一遺跡D地点出土遺物、西緑屋村遺跡出土遺物	86

# 第1章 環 境

## 第1節 自然的環境

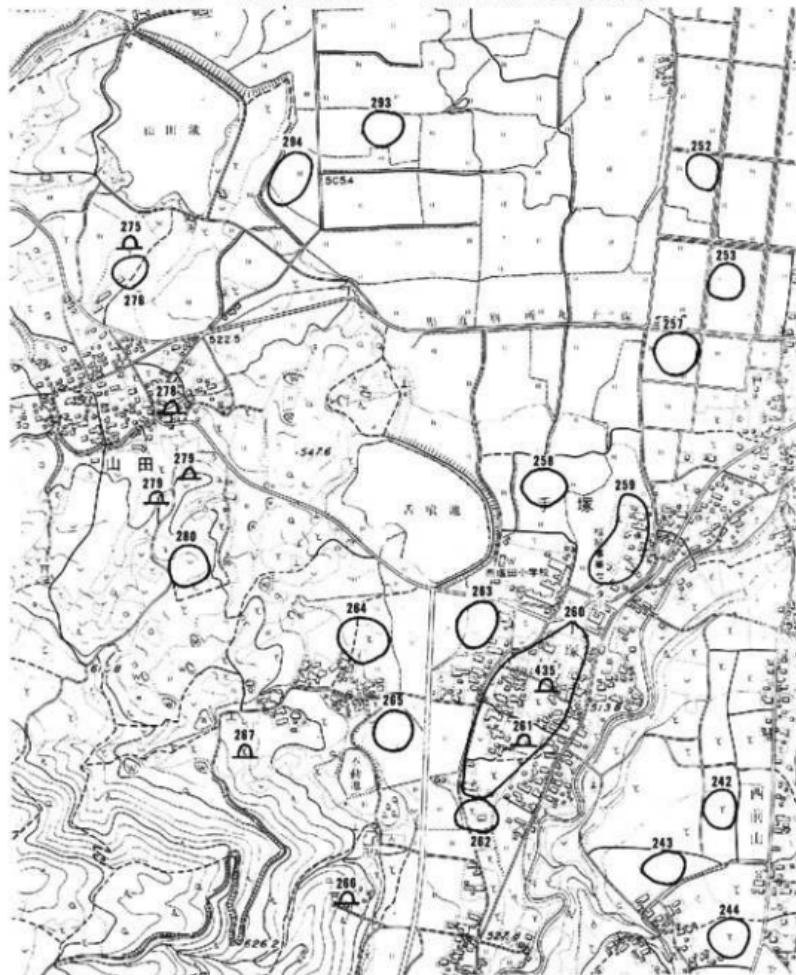
長野県東部に位置する上田盆地の南西部を占める塩川平は、独鉢山(1266m)をはじめ、大神岳(1250m)・大明神岳(1232m)・安曾岡山(1106m)・富士嶽山(1034m)などの独鉢山塊の山々と、大神岳から延びる小山脈、及び小牧山塊とにより開まれた南北約4km、東西約8kmの、東西に長い平坦な小盆地である。古くは信濃国造の治所に擬せられ、鎌倉時代には信濃守護所も置かれたと考えられるなど、早くから開発された上田小県地方の大穀倉地帯で、江戸時代には、「上田藩の穀倉地帯」とか「塩田三万石」などと称されていたという。現在では、林間工業団地がつくられるなど工場の進出も見られ始めているが、依然として、水稻栽培のほか、りんご・ぶどうなどの果樹栽培や薬用人参栽培が中心の農村地帯である。

この塩川平は、典型的な内陸性気候で、年間降水量900mm内外と雨の少ない上田盆地の中でも特に雨が少なく、全国でも有数な寡雨地帯として知られている。この平を潤す河川として、中央部を南西から北東に貫流する庵川、東部を北流する犀根川、西部の山沿を北西流する湯川の三大河川と、それらに流れ込む駒背川・尻無川・神戸川・滝沢川・追開沢川などのいくつもの小河川があるが、山が浅いためいずれも水量少なく、灌漑用水としては十分ではない。そのために、古くから溜池が築造され、大小合わせて200以上を数えることができるし、遠く依田川から取水して灌漑用水を確保しているのが現状である。一方、「日本のバミール高原」ともいわれるこの気候風土が多く文化財を守ってきて、現在「信州の鎌倉」と称されることにもつながっている。

今回、一帯の圃場整備事業に先立ち発掘調査された五反田遺跡・堰口ノ一遺跡・西紺屋村遺跡・滝沢遺跡は、塩田平第一の河川産川が山峠から平地に出て主にその左岸に形成した河岸段丘上、上田市大字手塚に所在する。正確に言うと、現在の手塚集落が、渓口にあたる堰ノ口からはじまり自然堤防上に細長く展開するのに対し、これらの諸遺跡は自然堤防から後背湿地にかけての地点に立地している。堰ノ口は「一の堰」、堰口は「二の堰」のそれぞれ取水口であることから付けられた地名であるが、これらの堰により産川から引かれた水と、伝説で知られた「舌喰池」や「山田池」などの溜池に溜られた水によって、塩田平最大の面積をもつ「手塚田園」での水稻栽培が行われている。

なお、調査対象諸遺跡の海拔は、五反田遺跡がおよそ515m、堰口ノ一遺跡が510~515m、西紺屋村遺跡が520m前後、滝沢遺跡がおよそ525mをはかる。

第1図 五反田遺跡、堀口ノ一遺跡、西細屋村遺跡の位置



- |                   |                   |                  |
|-------------------|-------------------|------------------|
| 242 上原遺跡（平安）      | 260 東細屋村遺跡（編文～平安） | 275 横山塚古墳（古墳）    |
| 243 東馬場道路（編文～平安）  | 261 クチアケ塚古墳（古墳）   | 276 竹の裏遺跡（編文・平安） |
| 244 前矢の食道跡（編文・弥生） | 262 樋の口遺跡（編文～平安）  | 278 ピワ塚古墳（古墳）    |
| 252 東長畠道路（編文～平安）  | 263 西細屋村遺跡（編文～平安） | 279 上の山古墳（古墳）    |
| 253 糸手道路（平安）      | 264 金井遺跡（弥生）      | 280 上打瀬遺跡（編文）    |
| 257 堀口ノ二遺跡（弥生～平安） | 265 鴻沢遺跡（平安）      | 283 千塚（弥生・平安）    |
| 258 五反田遺跡（編文～弥生）  | 266 様名山古墳（古墳）     | 284 原田遺跡（弥生・平安）  |
| 259 堀口ノ一遺跡（編文～平安） | 267 皇子塚古墳（古墳）     | 435 東細屋村経塚（近世）   |

## 第2節 歴史的環境

塩田平は埋蔵文化財の宝庫である。数多いその中で現在判明している最古の遺跡は、縄文時代早期後葉の茅山式土器を出土したことで知られている別所温泉の塩水遺跡で、7000年程遡れるものである。以後、時代によって分布に疎密の差はあるものの、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世と間断なく続いている。そのような中で、遺跡が最も濃密に分布しているのは産川流域である。以下、今回調査した諸遺跡の周辺を中心に、産川流域の遺跡を時代別にみてみたい。

先ず縄文時代だが、最古の土器は今回調査した五反田遺跡からかつて出土したものが知られている。縄文時代前期後葉の下島式直後形式とされているものである。中期になると初頭形式の土器がいくつもの遺跡で確認されている。すなわち、堰口ノ二遺跡、東糸屋村遺跡などである。中期中葉になると遺跡数が激増し、いちいち枚挙するのが煩わしいほどであるが、上記の3遺跡のほかに、堰口ノ一遺跡、西糸屋村遺跡などが主なもので、なかでも堰口ノ一遺跡からは、昭和52年西塩田保育園の建築に際し、諏訪地方の影響を強く受けた勝坂式期初頭に属する多くの土器が出土した。加曾利E式期に属する土器を出土している。北東方の検田見遺跡は昭和36年発掘調査され、勝坂式期の住居址1と多数の遺物及び埋葬人骨などが検出された。後期には、遺跡数が減少し上流域には確認されていない。中流域の中塩田地籍の神戸遺跡、梨の木遺跡から堰之内式期の土器の出土が知られている程度である。晩期になると一層減少し、その可能性のある遺物が断片的に見られるに過ぎなくなる。

弥生時代の遺跡は、この地方の一般的な傾向と同様に、後期後半の箱清水式期に至って突如として多くが出現し、中流域に大きな遺跡がいくつも見られる。それらの内、諏訪畠遺跡、桟木遺跡、西光坊遺跡、向田遺跡は発掘調査され、いずれも何軒かの住居址が検出されている。産川流域からはやや離れるが、尾根川流域の天神遺跡、追間沢川流域の和手遺跡は塩田平を代表する弥生時代後期の大遺跡である。産川上流域の手塚地区にも多くの該期遺跡の存在が確認できる。まだ未調査で表探による知見なので遺跡規模は不明だが、さして大規模な遺跡はないようである。しかし、最上流の樋ノ口遺跡をはじめ遺物の散布地はこの地区全域にみられ、開発が古くから始まっていることを物語っている。

古墳時代に入ても開発は順調に進められたようである。生活の跡、すなわち集落遺跡についてはいまのところ把握されていないが、宇王子の王子塚古墳、宇金井の皇子塚古墳、字滝沢のクチアケ塚古墳などいくつかの古墳が残されていることは、これら古墳の被葬者の指導のもと、自然開田の範囲をこえて、灌漑用水路を開鑿しての後背湿地の開発が行われたであろうことを示唆している。なかでも王子塚古墳は、墳形がやや損なわれているものの、塩田平唯一の前方後円墳（帆立貝型）で、後円部径28m、高さ6mをはかり、一応6世紀に位置づけられている。この古墳は、産川から取水した用水路「三の堰」が自然堤防を登り後背湿地に向かって曲がり流れ下る地点に立地している。「三の堰」の原初的ものはかなり古いと思われるが、重要な用水路の重要な地

点をあたかも扼するかのようにならされた王子塚古墳は、この地域の開発の歴史に欠くことのできない意味を持っていると考えられる。

奈良、平安時代の遺物を出土する遺跡も多い。『倭名類聚抄』に現れる「安宗郷」の一角として、当時からすでに相当規模の水田をもっていたと考えられるこの地域には、多くの住居があったものと思われるが、この時代の遺跡の主要部分は現在の集落と重なっているらしく、その実態について不明な点が多いのが事実である。しかし、古代も末期になるが、「平家物語」などに登場する「手塚太郎金刺光盛」がこの地の人であるならば、同じく「塩田八郎高光」が中塩田地籍でそうであったように、この辺一帯の開発領主だったはずであるし、「唐糸草子」(『御伽草子』)で「万寿姫」が賜った「手塚の里一万貫の地」がこの地であるならば、それは開発の進んだ土地だったと思われる。それはともかく、塩田平条里制度構の主要部分を占める広大な「手塚田園」を控えた土地である。弥生、古墳時代以来の開発の結果、豊かな土地であったことは間違いないさうである。

堰口ノ一遺跡の東に隣接して「大城（おおしろ）」と呼ばれている一角がある。徳伝によれば手塚氏代々の居館址であるという。真偽のほどはともかく、北側、西側がやや高められた南北に長い土地で、内耳土器の破片や古錢などが時々出土するという。手塚氏云々はさておいても、いずれ中世の土豪の居館址と考えよきそうである。また、昭和53年、宇東紺屋村の民家敷地より経塚が発見された。川原石に写經して埋納したもので、一つの石に數文字が書かれていた。このような経塚は鎌倉時代に始まり江戸時代に盛行したもので、一石一字が先行して多字のものが後出するといわれている。東紺屋村経塚の場合、書かれている文字が中世的であると考えられ、江戸時代までは下らないであろうとされている。いずれにしても、中世後期と考えられる時代に、このような宗教行為をした人がいたことは事実で、当地方における経塚史研究のためだけでなく、手塚地区の中世史解明のためにも大事な資料である。このように、中世における手塚は、居館趾といい経塚といい、政治的にも文化的にも高水準を誇る土地であったと行っても過言ではないだろう。

## 第2章 調査に至る経過

### 第1節 調査に至る経過

昭和60年度塩田西部地区県営開墾整備事業が計画され、その事業予定地内の大字手塚地区に五反田遺跡、堰口ノ一遺跡、西紺屋村遺跡、金井遺跡、滝沢遺跡の五遺跡が存在していた。このため工事主体者である長野県東信土地改良事務所、上田市塩田平土地改良区と、長野県教育委員会、上田市教育委員会の関係者が事前に保護協議を行い、工事施工前の事前の緊急発掘調査を実施することに決定した。

7月15日、地元の手塚公民館で五反田遺跡他発掘調査打合せ会議が開かれ、発掘調査の内容や調査時期、調査協力者の依頼等について打合わせが行われた。

7月26日、市役所西庁舎で調査会議が開催され、調査地点、調査方法等について具体的な話し合いが行われた。そして同日夜に、手塚公民館で再度打合わせが行われ、調査方法や調査協力者の確保等について協議がなされた。

こうして準備が整い、7月29日から調査現場に調査器材の運搬をし、テントの設営を行った。次いで重機による調査トレッチの設定作業が進められた。

7月31日、鍛入れ式が行われ、本格的な調査が開始された。調査は真夏の猛暑の中、連日行われ、途中降雨による中断があったものの、調査はほぼ順調に進行した。

調査の結果、縄文時代から平安時代にかけての竪穴式住居跡や掘立柱建物跡の遺構が検出された。また縄文時代から中世にかけての貴重な遺物が多量に出土した。

現場での発掘調査は10月4日まで行われ、これ以降は市立信濃国分寺資料館に於いて、出土した遺物の整理、報告書の作成が行われた。昭和61年3月31日、調査報告書が刊行され、発掘調査は終了した。

### 第2節 調査団の編成

上田市教育委員会は上田市文化財調査委員会の答申に基づいて、新たに五反田遺跡他発掘調査団を編成し、発掘調査を五反田遺跡他発掘調査団に事業委託して調査を実施した。調査団の構成は次のとおりである。

#### 五反田遺跡他発掘調査団名簿

顧問 黒坂周平（上田市文化財調査委員）

〃 五十嵐幹雄（〃）

団長 岩佐今朝人（上小考古学研究会長・日本考古学协会会员）

調査主任 塩入秀敏（上田女子短期大学講師・日本考古学協会会員）

調査員 龍野常重 塩田郷土史研究会

〃 横沢瑛 西塙田小学校教諭

〃 倉沢正幸 社会教育課学芸員

〃 中沢徳士 〃 (出向)

調査補助員 塩崎幸夫 駒沢大学々生

〃 西川和恵 奈良大学々生

事務局長 深井武雄 社会教育課長(昭和60年9月30日迄)

〃 桶口稔 〃 (昭和60年10月1日より)

事務局次長 内藤良典 文化係長

事務局員 倉沢正幸 文化係

#### 調査協力者、協力団体

(個人) 荒井邦芳・荒井すず子・荒井昭子・荒井力・荒井喜代晴・荒井あき子・荒井今朝雄・荒井枕雄・荒井恭子・池田五郎・市村光男・市村将彦・市村秀男・市村よし子・市村つる・石谷隆夫・石川幸・池内正司・石川功・市村吉視・市村重徳・石川加代子・市村隆・石川晴美・池田幸男・上野澄子・岡田清・岡村豊治・小野崎公・大口静夫・大口幸一・大口久行・日向・大口孝子・大口吉徳・尾見智志・片山英樹・金尾良信・小山幸・小池信吾・小池幹夫・小池定義・小出信和・小山てるみ・小池とし子・小泉文明・小山福人・小松実・小池たけ代・小池須子・小池重喜・小池すみ江・小島裕子・小池恭平・小池保男・小宮山貞夫・小宮山三男・小宮山博幸・小宮山よしみ・小池信二・小宮山典秋・倉沢正徳・倉沢正二郎・黒坂裕光・倉沢くら子・黒坂慶了・熊會謙一郎・久保田康広・酒井浩之・齊藤秀昭・齊藤清晴・三藤吉雄・齊藤徳夫・坂下逸子・酒井修身・齊藤晃・齊藤信義・齊藤幸男・齊藤武士・齊藤りつ子・坂本三夫・島田英樹・柴原明美・塩入友広・白倉安子・白倉淳一・塩入泉・島田ゆきよ・清水巧・島田俊栄・重田幸夫・重田幸次・白瀬貴久・関勝弘・開豊・高橋久美・滝沢光人・竹内豊・滝沢功・滝沢光則・滝沢常雄・滝沢晴雄・滝沢万喜大・滝沢徳男・高田尚紀・滝沢龍正・川中明・滝沢幸隆・滝沢るりえ・滝沢安子・滝沢教雄・滝沢章一・滝沢一男・滝沢雄三・勅使川原あい子・手塚繁・勅使川原功・勅使川原ちよ子・勅使川原良徳・勅使川原もとえ・中沢文夫・中井昭夫・中沢茂代・中島明・中島ちか子・中沢志げ美・中沢ゆき・中沢たか子・中沢美枝・西沢正・西沢弘子・西沢保男・西澤仁・西香子・西沢泉・西沢正美・野口和幸・能見佳子・箱田輝雄・橋詰孝之・古畑金吾・箱田周次郎・箱田衛夫・原田ひさ子・箱田勝男・畠中ゆかり・箱田清衛・原山智恵子・橋詰美奈・樋口晴雄・樋口寛英・樋口いすみ・樋口敏子・樋口恵一・樋口昭夫・樋口ちと子・樋口甲子・樋口志保・樋口敏恵・樋口千枝子・樋口清雄・東川博・樋口啓・保科くみ・保科満・箱田日出子・長谷川政勝・曲尾孝男・曲尾ちづ子・曲尾治久・曲尾敏雄・宮入裕子・翠川愛子・三浦祐嗣・翠川泰弘・翠川藤十郎・翠川美名人・茂木直美・山極袈裟弓・山極信子・山下芳郎・山下剛・山下ひとみ・山極直平・柳沢毫三・矢沢裕朗・柳沢もと子・山極ひさ子・山極和子・山極ちと・山本光輝・吉野正幸・吉原信正・吉野袈裟人・吉沢秀代。

(団体) 手塚自治会・塩田郷土史研究会

## 第3章 調査

### 第1節 五反田遺跡の調査

#### 1 調査日誌

昭和60年 7月29日 (月) 晴	午前中発掘調査準備。発掘調査諸器材の運搬、テント設営を行う。重機により排水路と調査トレッジを設定する。
7月30日 (火) 晴	重機により調査トレッジを掘り下げる。トレッジ内から黒曜石、打製石斧等出土。
7月31日 (水) 晴	鍛入れ式。
8月2日 (木) 晴後雷雨	表土除去作業。
8月3日 (金) 晴	昨日の溜った雨水の排水作業。
8月5日 (日) 晴時々曇	グリッド設定作業。
8月6日 (月) 曇時々雨	遺構検出作業。黒曜石、縄文土器片が出土。
8月7日 (火) 曇	遺構検出作業。
8月8日 (水) 曇時々曇	遺構検出作業。
8月9日 (木) 晴	遺構検出作業。
8月24日 (土) 晴	暗渠取り外し作業。
8月26日 (月) 晴	土壤半截作業。
8月27日 (火) 晴	土壤掘り下げ作業。遺構検出作業。
8月28日 (水) 晴	土壤半截作業。
8月29日 (木) 晴	住居跡、土壤半截作業。
8月30日 (金) 曇後雨	セクション実測作業。
8月31日 (土) 曇	セクション実測作業。写真撮影。
9月1日 (日) 晴	土壤のセグション実測作業。
9月2日 (月) 曇後晴	セクション実測作業。
9月3日 (火) 晴	土壤掘り下げ作業。
9月4日 (水) 晴	遺構掘り作業。遺構断面実測作業。
9月9日 (月) 晴	遺構掘り作業。写真撮影。
9月10日 (火) 晴後曇	遺構掘り作業。写真撮影。実測作業。
9月11日 (水) 雨	朝から雨の為、午前中公民館で遺物の仕分け、整理作業。
9月14日 (土) 晴	遺構掘り作業。実測、写真撮影。
9月15日 (日) 曇時々雨	遺構掘り上げ作業。清掃、実測、写真撮影。
9月17日 (火) 曇	写真撮影。

9月19日（木）曇 実測作業。  
9月21日（土）曇時々雨 実測作業。  
9月27日（金）曇 排水作業。清掃作業。全体写真撮影。

現場での発掘調査は10月4日まで行われ、これ以降は信濃国分寺資料館に於て、出土した遺物の整理、報告書の作成が行われた。昭和61年3月31日、調査報告書が刊行され、発掘調査は終了した。

## 2 検出された遺構

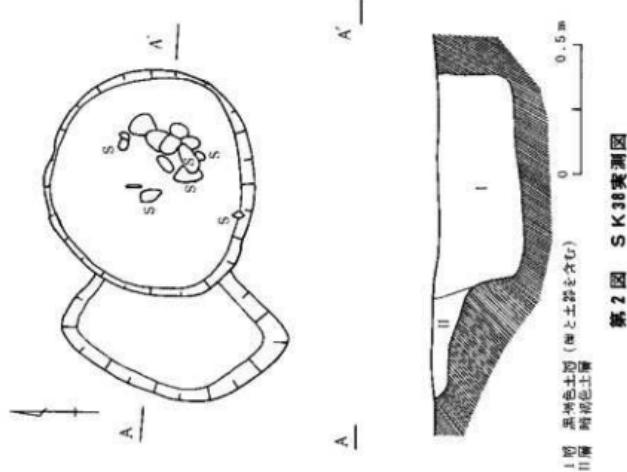
五反田遺跡の東方はかつて洪水の溢れか、幅十数mにわたる砂礫の流入した層があり、厚く堆積し、その下に遺構があり、遺構の見究めや検出が困難であった。また北西から南東にかけて、近世以降の暗渠の溝が一本連なり丁度遺跡を斜めに二分した格好になった。遺構の分布は暗渠の南側は中央より西のみに検出されたが、東方は検出できなかった。これは砂礫の堆積による困難さからくるものと思われる。暗渠の北方は分布が平均した距離内にある。

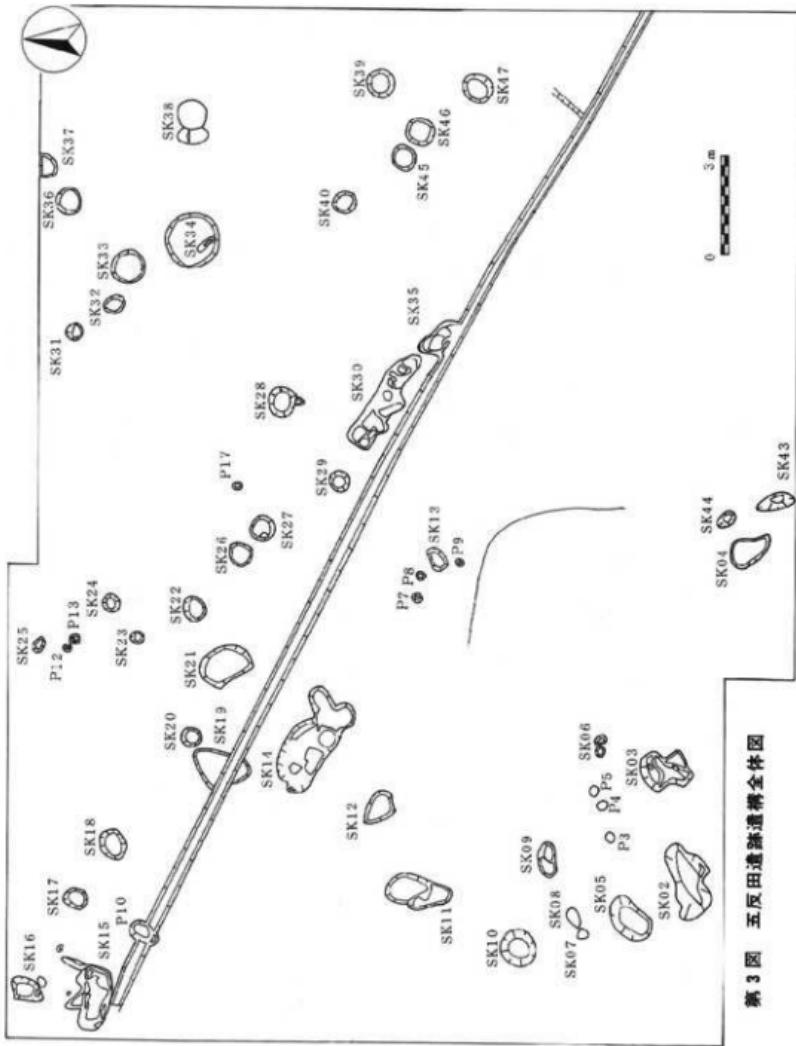
遺構は土壙類と若干のピットのみであった。土壙の形態は円形がほとんどで、大きさは2mを越すものなく、1m以下の小形のもので深さも1m以下であった（第2図）。

遺物が多数検出された土壙はSK05、SK36、SK38で多くの土器片が採集された。土器は縄文時代前期後半の諸磯C期と次に編年される晴が峯期に該当するものである。

土壙の性格については今のところ不明であるが、住居址の検出がなく、住居址群より離れた場所にあり、構築時期は土器から縄文時代前期後半といえる。構築目的は何であるか、何に使用されたか等は今後の研究の課題としたい。

ピットについては若干検出があるが、どれも土壙付近に存在し、土壙の関連遺構と考えている。





第3图 五反田洼油藏整体图

### 3 出土した遺物

#### (1) 土器

土器は光形のものではなく、全部破片である。しかし破片は大きいものが多くあり、土器の特徴をとらえるに容易であった。破片は多く出土したが個体数はあまり多くなく、十数個体は越えない。

拓影1～11は第36号土壙内及びその付近より出土発見されたもので同一個体となろう。器形は口縁部は不明であるが、頭部のややしまった深鉢となる。二次的な加熱をうけて赤変し、上部は灰褐色をしている。施文は器面全体に荒い羽状繩文を施こし、胴上部は棒状工具で直曲線を引き、その間の空間には三角沈刻文が印刻されている。この土器は諏訪地方の晴ヶ峰式や関東地方の十三菩提式に比定されよう。

拓影12～20は第5号土壙より発見され、波状口縁を持つ土器である。明るく赤褐色に焼け地文は平行沈線を横書きに器面全体に引きその上に結節状浮線文を斜めに埋めつくしている。12はその口縁部、13、18は胴部である。17は結節状文を施しているが逆三角形の空白部を残している。15・16は平行集合線文があり、土器の下胴部であろう。ボタン状貼付文が付されている。第5号土壙から発見された土器は個体数は数個体になるが、結節状浮線文やボタン状貼付文から諸磯C式と共に通点がいくつか見られる。

拓影21～31は第38号土壙より発見されたもので石英粒の多い胎土で焼成はよくない。25は荒い繩文、27の結節状文、28は平行沈線文以外は同一個体である。平縁の口部を持つ深鉢で全面結節状浮線文を埋めつくし、ボタン状突起が至る所に貼付されている。

拓影32は小形の浅鉢の破片である。粒子の細かい胎土で黒褐色を呈し、焼成は良好である。半割竹管による平行な直曲線が器面一ぱいに埋まっている。

拓影33は粒子の粗い長石をつなぎに入れた厚めの土器である。焼成は良好であるが、二次焼成を受けて裏面はひどく荒れている。結節状文にボタン状突起がある。

拓影34は綾杉形の平行線文である。ボタン状突起のあとが残されている。

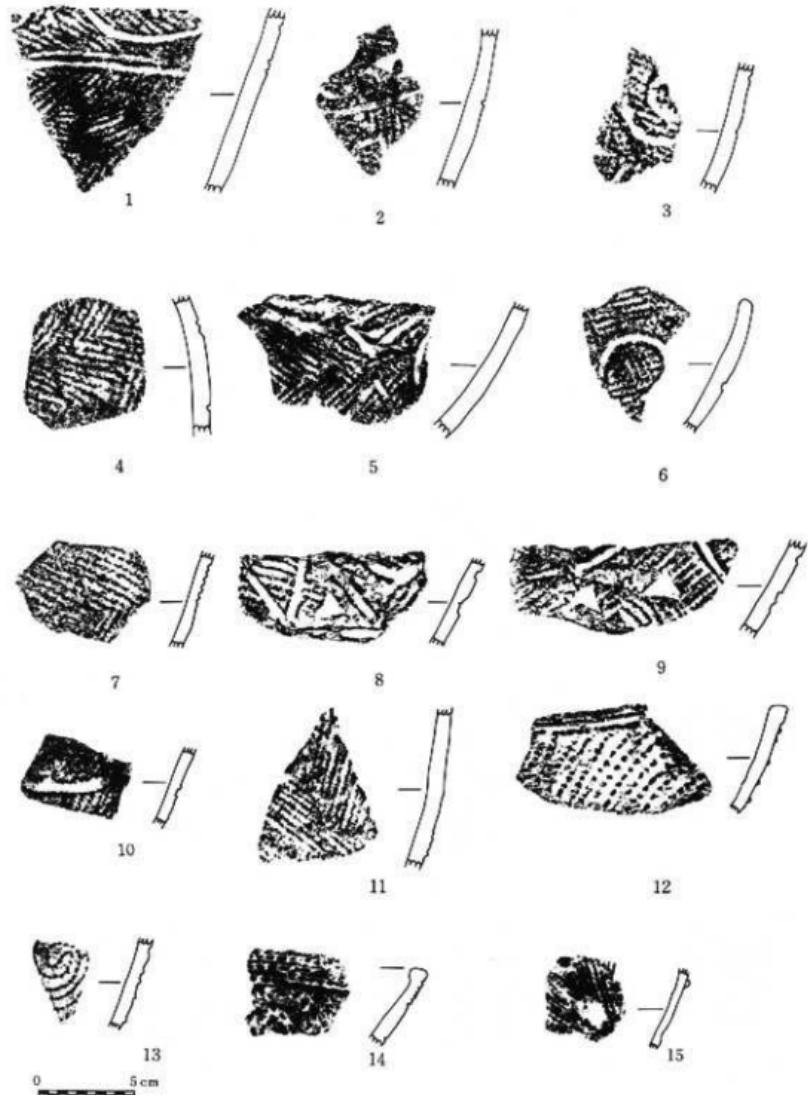
拓影35は上部は胴部くびれの部分で、太い紐線が見られ、今までの土器より大きめのボタン状突起がある。

拓影36は横に結節状文、縦に平行沈線文、37、40は下胴部分に当り平行沈線文。これらはみな前期後半の時期の特徴を具備している。38は連続爪形に大きなドーナツ状突起を貼付している。下島式にみられる特徴の土器である。

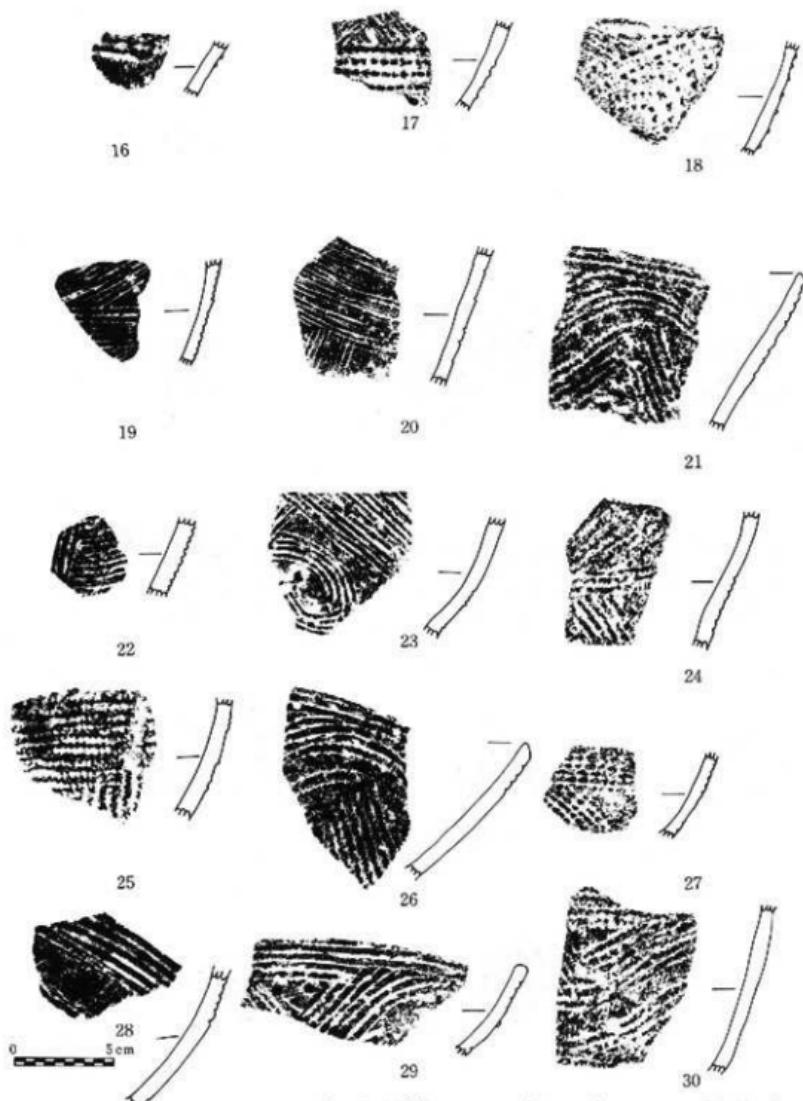
拓影39は折返し口縁で三角印刻文が並び結節状文がいく条も口縁に沿って平行している。

拓影21から38まで、記した土器は全部同一時期のものとしてみてよく前期後半の下島式あるいは諸磯C期と比定できる。

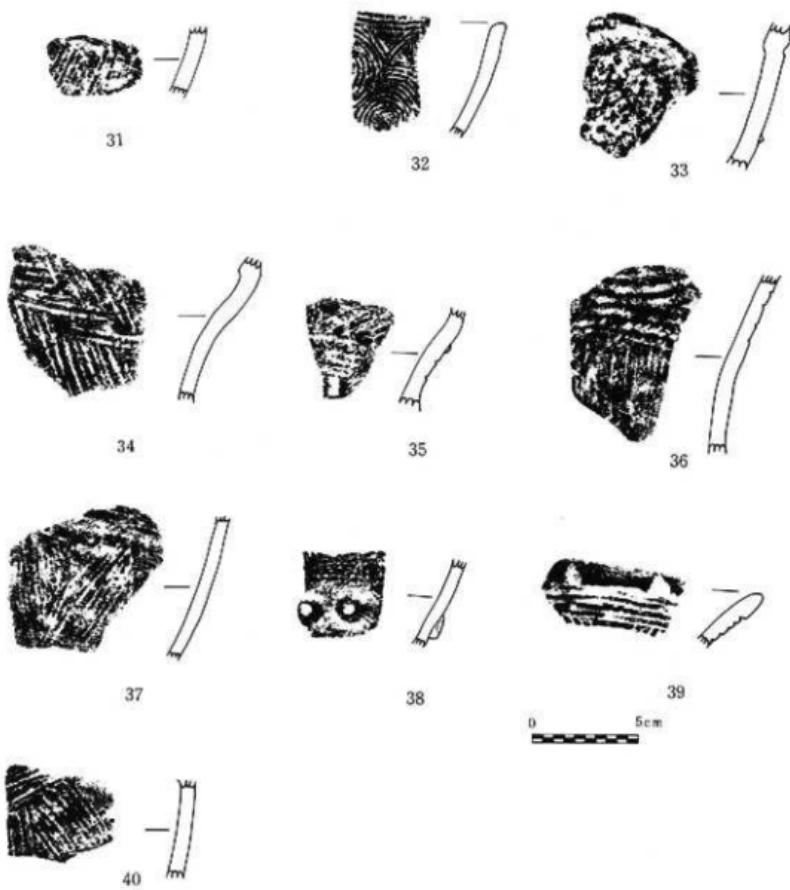
五反田遺跡の出土土器は、細かく分けて連続した二時期となり、前期後半の生活舞台を画したのであろう。



第4図 五反田遺跡出土遺物 1~11 (SK 36)、12~15 (SK 05)



第5図 五反田遺跡出土遺物 16~20 (SK05)、21~30 (SK38)



第6図 五反田遺跡出土遺物 31 (SK38), 32 (SK32), 33, 34 (SK41)  
35~37 (TR9), 38 (G2), 39 (SK22), 40 (TRA)

(2) 石器

① 石鎌

写真1、2は抉りの深い入念な両面加工により製作され、3は抉りは浅く、体は薄い。製作は荒く粗製である。ともに黒曜石である。

② 石鋸

良質な黒曜石の細長い薄い剝片の一方を両面より加工し、刃部とする。基部は両側面より抉り茎とする。刃部は鋸状になり、物を切断するに便利な機能を有する。

③ 石斧

写真5は粘板岩、6は変質頁岩、ともに短冊形をした石斧で、土掘具であろう。

④ 横刃石器

砂質頁岩製、片面加工。

## 第2節 堀口ノ一遺跡の調査

堀口ノ一遺跡は、上田市立西塙田小学校の北側及び北東の水田地帯と集落のある一帯にかけて所在する。南側は字立石で、縄文時代中期土器を出土するが、堀口ノ一遺跡と一体とされ独自の遺跡名はない。西側は水路を挟んで字五反田で、今回の発掘調査の対象になっている五反田遺跡が所在する。五反田遺跡と堀口ノ一遺跡とは狭小な水路が隔てているだけで、この両遺跡も本来は一つの遺跡だったとも思われるが、このことについては後述する。東側及び北東側に堀ノ口一地籍が続くが、東側に隣接する地帯は通称「おおしろ（大城）」（旧字大城）で、俚伝では手塚氏居館址とされている。

今回の調査の対象になったのは、堀ノ口一遺跡のうち産川の自然堤防上に立地している集落部分を除いた水田地帯である。調査に当たっては、調査地点を選定するために重機を用いてトレーナーを東西南北に何本も設定した。東西方向にはほぼ水田一枚ごとに、南北方向には一枚おきくらいに設定した。その結果、濃淡の差はあるもののほぼ全域にわたって遺物の出土がみとめられるが、なかでも遺物の多い4地点を選んで調査地点とし、A～D地点とした。

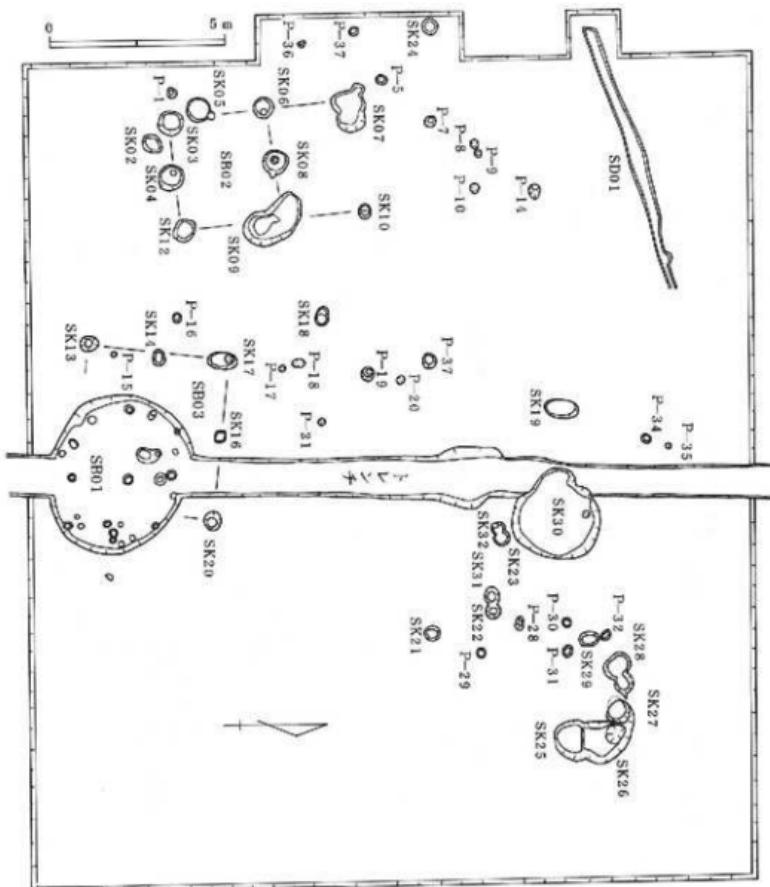
### I 調査日誌

7月31日（水）晴	鍬入れ式。重機により表土除去作業。A地点グリッド設定作業。
8月1日（木）晴時々曇	A地点、B地点、C地点、D地点の表土除去作業。A地点の遺構検出。
8月2日（金）晴後雷雨	A地点、D地点遺構検出作業。D地点で竪穴住居跡が出土。
8月3日（土）晴	昨日の溜った雨水の排水作業。D地点の遺構検出作業、土壤を確認。
8月5日（月）晴時々曇	A地点、D地点の遺構検出作業。
8月7日（水）曇	B地点、C地点のグリッド設定作業。D地点遺構掘り下げ作業。
8月8日（木）晴時々曇	C地点のグリッド設定作業。D地点の遺構掘り下げ作業。
8月9日（金）晴	A地点のセクション実測。B地点、C地点、D地点で、遺構検出。
8月10日（土）晴	B地点遺構検出作業。灰釉陶器片出土。
8月11日（日）晴	B地点遺構検出作業。A地点の写真撮影。
8月12日（月）曇時々雨	昨夜の降雨で溜った雨水の排水作業。C地点の遺構検出作業。
8月17日（土）晴後曇	B地点の遺構検出作業。竪穴住居跡、土壤、柱穴状ピット検出。
8月18日（日）晴	B地点の遺構検出作業。灰釉陶器片、石棒等出土。
8月19日（月）晴後曇	B地点の遺構検出作業。擡立柱建物址、住居跡、土壤等を確認。
8月20日（火）曇後晴	B地点、C地点の遺構検出作業。完形の土師器壺が出土。
8月21日（水）晴	B地点、C地点の遺構検出作業。D地点の北側にトレーナーを設定。
8月22日（木）晴	B地点東側の水路の水がC地点に流入排水。その他遺構検出作業。

8月23日（金）晴	B地点、C地点の遺構検出作業。C地点のK4グリッドよりほぼ完形の灰釉の長頸瓶が出土。
8月24日（土）晴	C地点遺構検出作業。D地点の土壤半截
8月26日（月）晴	D地点の土壤半截、平板実測（1:40）作業。
8月27日（火）晴	A地点、D地点の土壤掘り下げ作業。遺構検出作業。
8月28日（水）晴	A地点、B地点、D地点の遺跡掘り作業。精査。
8月29日（木）晴	A地点の土壤半截、C地点、D地点の遺構検出作業。
8月30日（金）曇後雨	A地点のセクション実測作業。C地点の清掃及びプラン精査。D地点の遺構掘り作業。
8月31日（土）曇	A地点遺構掘り作業。B地点、C地点のプラン確認と清掃。
9月1日（日）晴	B地点の遺構検出作業。
9月2日（月）曇後晴	セクション実測作業。
9月3日（火）晴	遺構掘り作業。実測作業。
9月4日（水）晴	遺構掘り作業。遺構断面実測作業。
9月5日（木）晴	遺構掘り作業。
9月6日（金）晴後雨	遺構掘り作業。写真撮影。午後手塚公民館に於て遺跡の説明会を実施。
9月9日（月）晴	遺構掘り作業。写真撮影。
9月10日（火）晴後曇	遺構掘り、実測作業。写真撮影。
9月11日（水）雨	朝から雨のため、午前中公民館で遺物の仕分け、整理作業。
9月12日（木）曇後晴	遺構掘り作業。実測、写真撮影。
9月13日（金）晴	A地点の遺構掘り作業。実測、写真撮影。
9月14日（土）晴	遺構掘り作業。実測、写真撮影。
9月15日（日）曇時々雨	遺構掘り上げ作業。清掃、実測、写真撮影。
9月17日（火）曇	遺構掘り上げ、実測作業。
9月18日（水）曇後雨	遺構掘り上げ作業。実測、写真撮影。
9月19日（木）曇	遺構掘り上げ、実測、写真撮影。
9月21日（土）曇時々雨	遺構掘り上げ、実測作業。
9月22日（日）雨	降雨の中、遺構実測作業を実施。
9月26日（木）晴	昨日の溜った雨水の排水作業。
9月27日（金）曇	A地点、C地点の排水、清掃作業。全体写真撮影。
9月28日（土）曇後雨	B地点、C地点遺構掘り上げ作業。平板測量。
9月30日（月）曇後雨	B地点、C地点排水作業。清掃、実測作業。
10月1日（火）晴	B地点、C地点の清掃、遺構面実測作業。写真撮影。
10月2日（水）晴	B地点、C地点の清掃。遺構実測作業。全体写真撮影。
10月4日（金）晴後曇	A地点の平板実測作業。現場での作業はすべて終了した。

## II A 地点の調査

### 1 検出された遺構



第7図 墳口ノ一遺跡A地点全測図

### (1) 縄文時代の遺構（第8図）

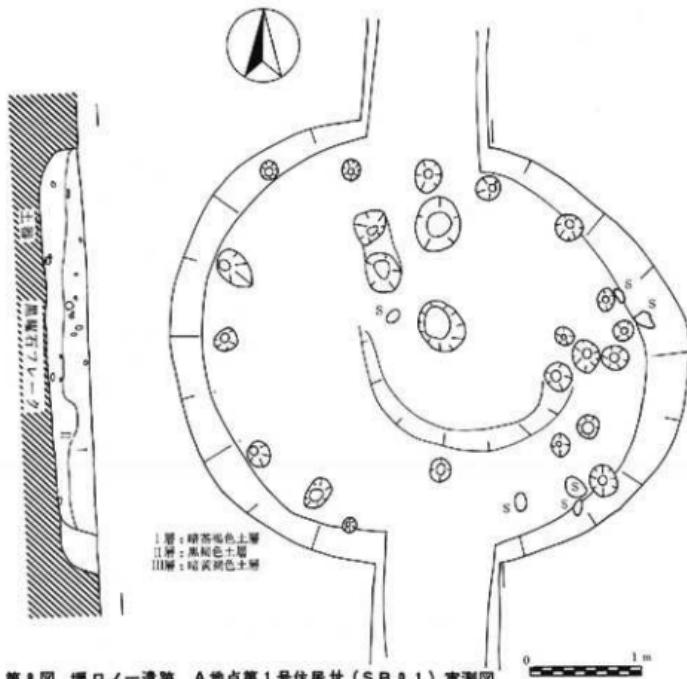
この時代の遺構としてはっきりしているものは、調査区域中央南寄りに検出された竪穴式住居址1軒があるだけである。

#### ① 第1号住居址（SB01）

調査区域中央部を南北に貫ぬく形になったトレンチによって遺構中央部を貫通され、東西に両断されてしまった。トレンチ基底部が住居址床面とほぼ同じであるため、ピットなどは比較的破壊されずに遺存していたと言える。

東西にやや長く約4.7m、南北約4mをはかり、深さは中央部で約35cmがはかれるが、床面はだいたい平坦である。床面ピットは合計24ヶが存在し、壁に沿う形で並ぶかにみえるいくつかは支柱穴をみなすこともできるが、主柱穴については特定できるピットがなく不明である。炉址は検出されなかった。トレンチにより破壊されてしまったものとも考えられる。中央部のピットは焼土など炉に伴うものを全くもたず、炉とは考えにくい。中央部南側に緩やかな段があるが、そのもつ意味は明らかでない。

覆土及び床面から土器・石器などの遺物が出土し、そのもつ特徴から縄文時代前期の末頃に位置づけることができるものである。



第8図 堀口ノ一遺跡 A地点第1号住居址（SB01）実測図

## (2) 歴史時代の遺構

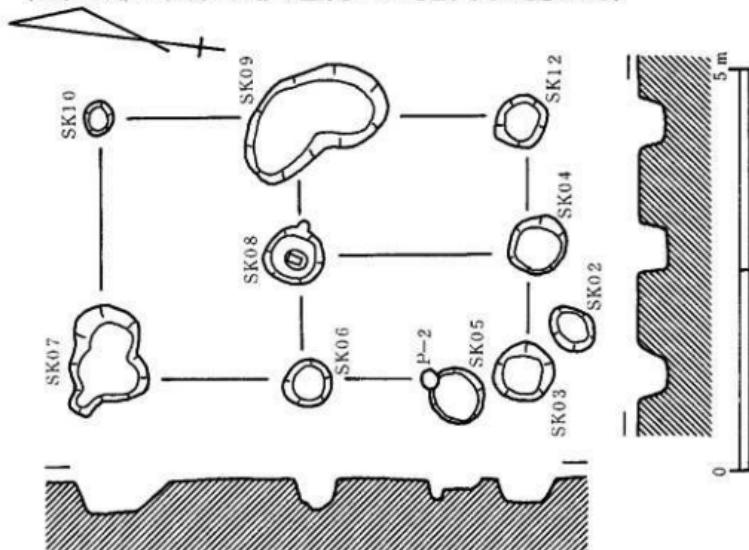
### ① 堀建柱建物址 (SB02, 03)

#### ◎第1号堀建柱建物址 (SB02)

調査区域西端に検出された。南北に長い構造をもち、N-7°-Wとやや西に振って建てられている。柱穴は8ヶ (SK03, 04, 06, 07, 08, 09, 10, 12) が残っているが、南側と中間の2列は3ヶずつ (SK03, 04, 12) (SK06, 08, 09) であるのに対し、北側は中間の1ヶがなく両端の2ヶ (SK07, 10) がのこっている。柱間は、東西約1.5m、南北2.7~3.0mをはかり、南北に間延びさせた変形プランを呈する。堀建柱建物址ではないのではないかとも考えられたが、柱穴のいくつかから柱の一部と思われる木片が出土したり、特に中央の柱穴 (SK08) の底部には柱受けの板が遺存しており、堀建柱建物址として誤りないものである。とすると、(5尺+5尺)×(9~10尺+9~10尺)という形か、(5尺+5尺)×9~10尺の本体に10尺×9~10尺の庇様のものが取りつけられた形の二通りが考えられるが、北側列の中間柱が検出されなかった点を考えて、一応後者の可能性が高いとしておく。

#### ◎第2号堀建柱建物址 (SB03)

調査区域南側中央部に検出された。半ば以上が縄文時代の住居址と重複しており、全体プランの把握は不可能であった。西側の南北柱列 (SK13, 14, 17) と、北側の東西柱列 (SK17, 16, 20) が残存しており、N-7°-Eと東に振った方位をもつ。柱間は210~220cmをはかり、(7尺+7尺)×(7尺+7尺)の正方形プランを呈するものと思われる。



第9図 墓ロノ一遺跡A地点第1号堀建柱建物址実測図

### ② 溝址 (SD01)

調査区域北西すみに検出された幅20~55cm、深さ約5cm、長さ約8mをはかり、西南西から東北東に向けて走行する直線的な小規模な溝で、先端は不明瞭になり消滅する。西端と東端では5cmのレベル差があり、水が流れることはないが、覆土の状態からは水が流れた痕跡は認めがたく、水路とはみなしがたい。

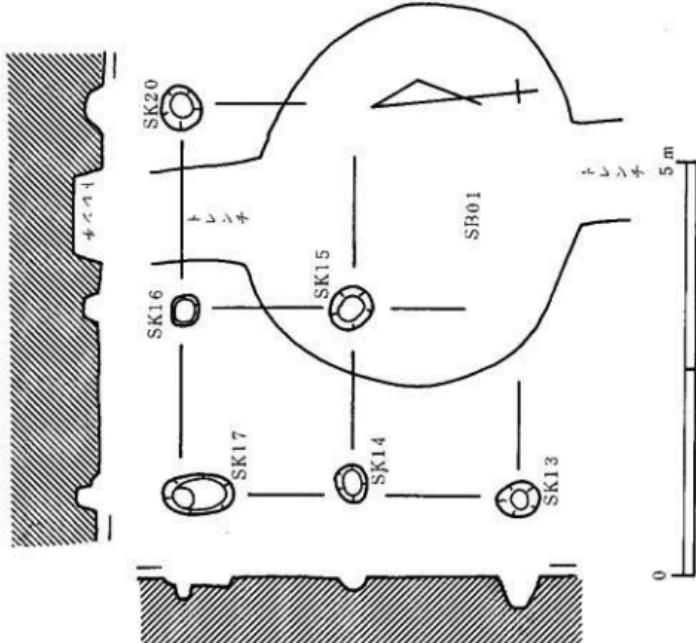
### ③ 上塙、ビット

沢山の土塙、ビットが検出されている。それらのうちのいくつかは第1・2号掘建柱建物址(SB02-03)の柱穴である。そこで、ここではそのような柱穴は除外し、それ以外の土塙、ビットについて記すことにする。

#### ◎第25号土塙 (SK25)

調査区域北東に検出された土塙で、第26号土塙を切っている。東西方位に長軸をもつ太い卵形の平面プランを呈し、長径104cm、短径83cm、深さ31cmをはかる。断面もちょうど卵を半剖した形をしている。覆土は2層に分けられ、第II層(下層)に多量の炭化物を含むことはこの土塙の性格を考えるうえで重要なこととなろう。

非常に多くの遺物を出土し、土師器甕(大小2形態)、羽釜、壺(高台の有無による2形態)、



第10図 墓口ノ一遺跡A地点第2号掘建柱建物址実測図

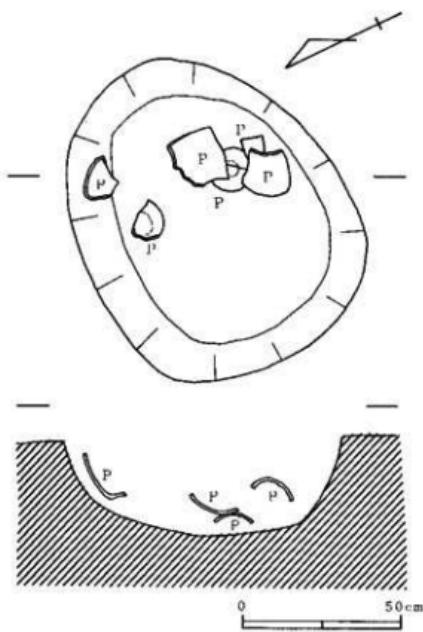
器台(鍋敷き状)、灰釉陶器長颈瓶などがある。これらの遺物は更に細分可能だが、それについては遺物の項にゆずる。その出土状態に特殊性は認められないものの組成からは一括理納されたものの如くである。

#### ◎第26号土壙 (SK26)

第25号土壙(SK25)によって切られており、南北方位に長軸をもつ平面卵形プランを呈し、残存部分は長径約140cm、短径約120cm、深さ約20cmをはかる。出土遺物として土師器、須恵器の环破片など少量のはかに、覆土層上層からの出土だが羽口破片の出土があり、特筆されよう。

#### ◎第30号土壙 (SK30)

調査区域北側中央部に検出された平面略円形プランの大型土壙である。西端上部を第2トレンチ(SG-1A Tr-2)によって破壊されている。南北径245cm、東西径265cm、深さ38cmをはかる。南西側の底部の一部に85cm×55cmほどの貼床状の堅い粘土の部分があり、底部には径約20~40cmのピットが5つ存在する。出土遺物として記すべきものはないが、土師器、須恵器のいくつかの破片は土壙の所属時期をものがたっている。

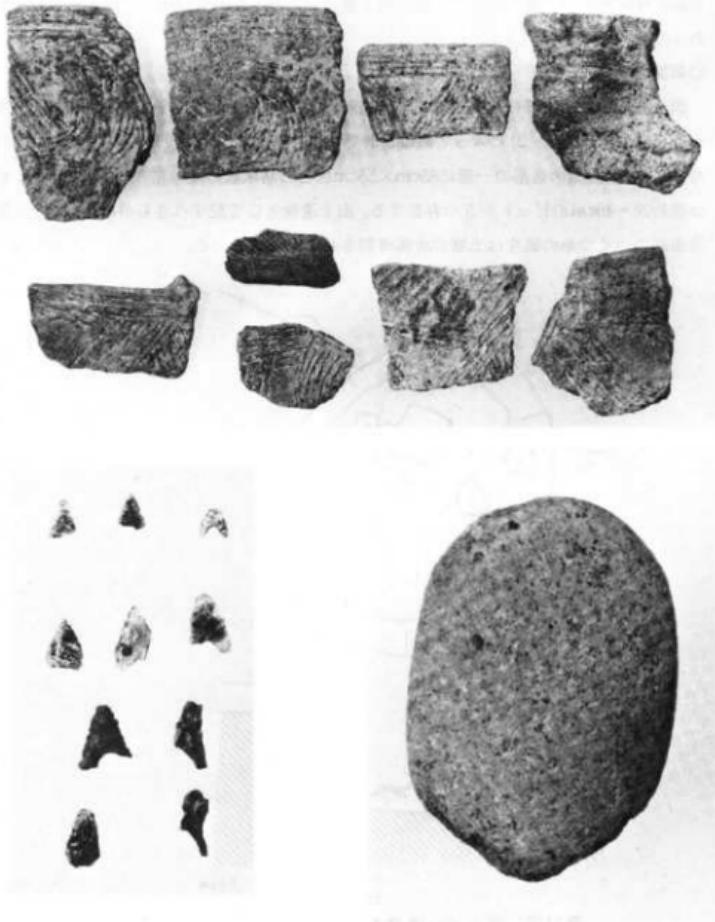


第11図 墓口ノ一遺跡A地点  
第25号土壙 (SK25) 実測図

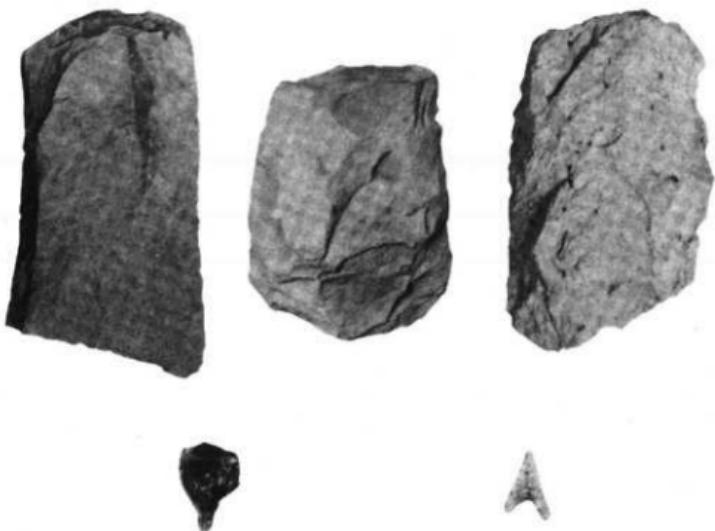
## 2 出土した遺物

### (1) 縄文時代の遺物（第12・13図）

この時代の遺物としては土器、石器及び黒曜石片があるが、これらの内の一部を除く殆どが第1号住居址（SB01）の覆土及び床面より出土したものである。



第12図 堤口ノ一遺跡A地点出土遺物



第13図 堀口ノ一遺跡A地点出土遺物

① 土器（第12図）

全て破片であり深鉢の一部であることが想像されるのみで、器形を復元できるものはなかった。胎土は石英・長石など細砂粒を多量に含みざらざらしている。焼成状態はあまり良くなくやや軟質でもろい。外面とも暗褐色を呈するものが多い。

施文に縄文は殆ど見られず、半裁竹管による斜位の平行沈線を羽状あるいは弧状、同心円状に施すものが殆どで、平行沈線文の上の所々に低いボタン状貼付文が置かれている。これら以外の器面への装飾は認めることはできない。

全器形を想像することは難しく、出土した破片からは、体部に膨らみやくびれが少ない、平底の底部からやや開きながら立ち上がり、平縁の口縁部に至る形状を呈するものらしいことがうかがえる程度である。平縁の所々に山形の突起をもつものも認められる。

② 石器（第13図）

黒曜石製の石鎚が大部分である。茎を持つものは皆無で無茎凹基のものが全てを占める。その形状は更に細分が可能で数種に分けられるが、概して中型の尖鋭なものが多いと言えよう。

石鎚の外には石錐・スクレイパーなどがある。石錐は手でつまむ部分に小さいが尖った錐部をもつ手揉み型のもので、これも全て黒曜石製である。

## (2) 歴史時代の遺物 (第14図)

歴史時代の遺物として出土を見たのは、平安時代中期に属すると思われる土師器・須恵器・灰釉陶器などと、中世後期の土師質土器・陶磁器・金属製品などがある。しかし、その量はあまり多くなく、図示できるものも少ない。そのような中で、第25号土壤 (SK25) 出土の遺物は一括出土のまとまったもので、組成状況や灰釉陶器からある程度限定した年代を求めることが可能な良好な資料である。

### ① 土師器 (第14図-1~10)

壺・壺蓋・甕・羽釜・器台があり、3・5以外は全て第25号土壤 (SK25) 出土遺物であり、3は第1号掘立柱建物址を構成する柱穴 (SK07) よりの出土である。

壺は全て内面黒色磨研処理され十文字や花弁形十文字の暗文をもつもので、底部は右回りに回転条切りがされている。高台の有無により2種類に、高台をもたないもの(1~3)はその大きさや体部形状からさらに細分可能である。高台を有するもの(4)は高台の高さが器高の1/3強を占める、いわゆる足高高台付壺と呼ばれるものである。

壺蓋(5)は須恵器を模倣したもので、擬宝珠は高いが低くなる前兆を示している。

甕(6・8・9)は大小により2種類に分類できる。8は最大径を口縁部にもち、「し」の字状に僅かにくびれる頸部から胴部上半にかけ緩やかに膨らみ、底部に向かいゆっくりと收敛する長胴形の器形を示す。ロクロ水挽痕を明瞭に残し、焼成良好で橙褐色を呈する。

羽釜(7)は、比較的小型であるがしっかりした鋲をもち、胴部の膨らむ器形のものである。

器台(10)は径14cm、高さ2cmの鍋敷状の形状を示し、器面は平滑であるが縁からは凸レンズ状にやや膨らむ。あまり類例のない遺物である。

### ② 須恵器

出土量が少ないと小破片ばかりであることから図示できるものはない。僅かな破片は壺の一部が比較的多いと言える。

### ③ 灰釉陶器(11)

長頸瓶の体部で、口縁部から頸部までと底部を欠く。緻密な胎土で乳灰色を呈しロクロ痕が内面に明瞭である。肩部から胴部にかけて黄灰色の釉薬がかかり、その上にくすんだ緑色の釉薬がかけられている。

### ④ 土師質土器(12)

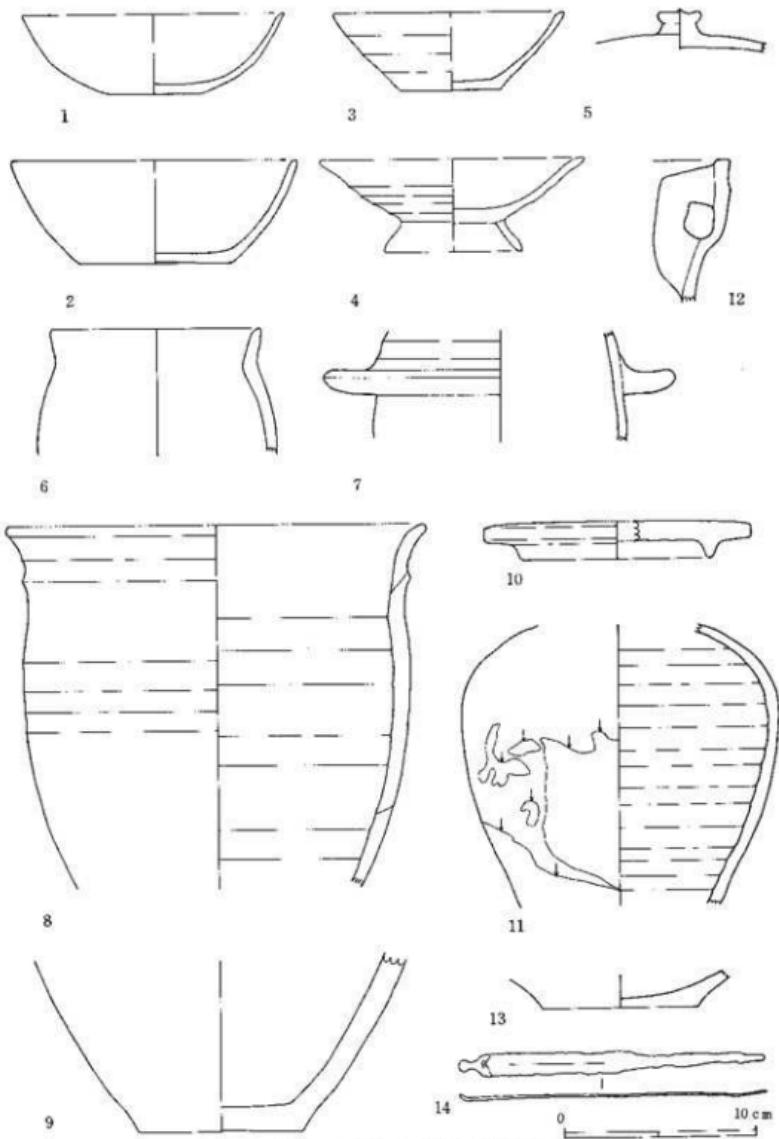
内耳土器の口縁部と内耳の部分で、一般的な形状を示している。

### ⑤ 陶磁器(13)

ここに図示した黄灰色を呈する内外面に柿淡色の釉薬がかけられた陶器の外に、中国産の青磁碗の破片がある。

### ⑥ 金属製品(14)

銅製の笄である。長さ約16cm、厚さ1.5~2mmをはかり、簡素な彫刻が施されている。



第14図 墓口ノ一造跡A地点出土の遺物

### 3 まとめ

堀口ノ一遺跡A地点は、調査の結果、堀口ノ一遺跡の外縁部をなすものであることがわかった。遺跡の主体部は現在の集落にかさなっていると思われるが、そうすると、他のB、C、Dの3地点も全て外縁部である。しかし、B、C地点が低地であり、D地点がやや高燥な場所であるのに對して、A地点は低地から微高地にかかる地点であり、完全な低地ではない。そのために、微かな高まりを見せる舌状の沖積台地上に立地する五反田遺跡の縁辺部でもあり、両遺跡が重なり合う地点であるのである。

縄文時代の遺構、遺物は、五反田遺跡の一部を占めるものとして捉えるべきもので、第1号住居址とそれにもなうもので殆どを占める。前期後葉から末葉に位置づけられる諸磯b～c式期に比定されるものだが、もう少し時期を限定するならば、b～cへの過渡期のうちのどちらかと言ふとややbに近い時期と言えるだろう。ともかく、塩田平は勿論、上田小県地方においてもこの時期の調査例は少なく、住居址の検出は初めてのことである。その意味で本例は今後の該期研究のための好個の資料になろう。

歴史時代の遺構、遺物としては、平安時代と中世に比定できるものがある。先ず、2棟の掘建柱建物址はいずれも梁間2間、桁行2間の建物が復元できるが、第1号掘建柱建物址は150cm(5尺)と270～300cm(9尺～10尺)という2種の柱間をもつ南北に長い長方形の平面形で、第2号掘建柱建物址は200～210cm(7尺)の柱間の正方形プランを呈する。第1号掘建柱建物址は北側の柱列の中間の柱を欠くが、これがどのような意味をもつかは不明である。けれども、中央の柱は基礎に礎板をもち、特に沈下を防ぐ施設を施していることから、床に大きな荷重のかかる建物、すなわち倉庫ではなかったかと考えられる。第2号掘建柱建物址も遺構の重複により判然としないものの、やはり同様の建物を想定してよいだろう。

上城のうち特に重要なのは第25号土塼である。覆土に多量の炭化物を含む点と、遺物の一括埋納と思われる点などから、やや特殊な性格が考えられようが、それはさておき、出土した一括遺物は大変貴重なものである。それは、一時期に埋められたセットとしてとらえられること、土師器と灰釉陶器で組成され須恵器を含まないこと、土師器壺に足高高台付壺があること、灰釉陶器に限定した年代を与えることができるから、この時期の土器編年の指標となりうる資料であるからである。灰釉陶器長頸瓶は美濃窯の大原2号窯式期に比定でき、10世紀後半の年代が与えられる。

中世の遺物は多くない。僅かに内耳土器、古錢、笄が出土しただけで、量的にも微量である。遺構は全く検出されなかった。手塚氏居館址と称される通称「大城」地籍からは、現在でもしばしば中世遺物が出土することなどから考えて、これらの遺物は集落主体部から何らかのことによりもたらされたものであろう。

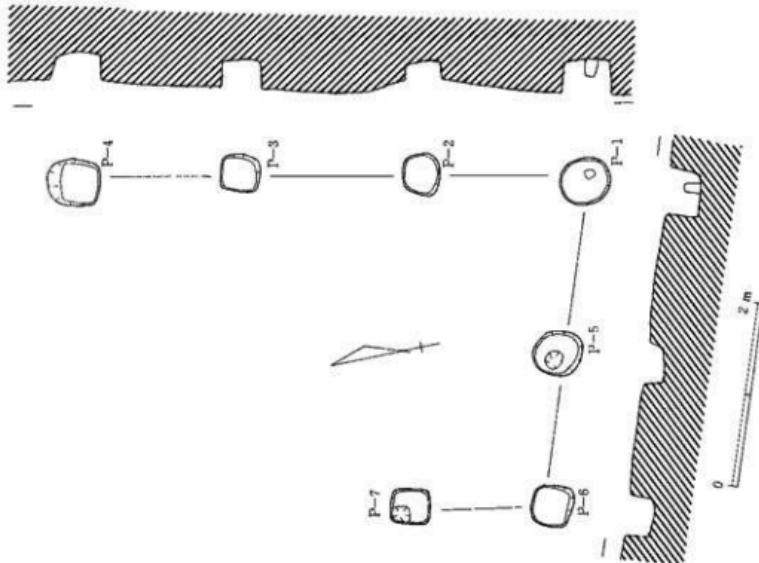
### III B 地点の調査

#### 1 検出された遺構

##### (1) 歴史時代の遺構

- ① 掘建柱建物址 (SB01, 02)
- 第1号掘建柱建物址 (SB01)

調査区域北西隅拡張区に検出された。柱穴は、東側南北列で4ヶ、南側東西列で3ヶ、西側南北列で2ヶの計7ヶ (P1~7) の柱穴が残存しており、全ての柱穴は検出されなかった。全プランは把握できないものの、一応、柱間180cm(6尺)で梁間2間、桁行き3間の南北に長い長方形プランの建物が想定される。主軸方位はN-10°-Eで東に振ってたてられている。P1には柱根が残り柱間寸法を割り出すのに恰好の基準となった。ところが、このP1の柱根を基準にして建物を想定すると、南北柱列と東西柱列とは直交せず、約80°にしかならないのである。最大限に広げても直角が求められない事実は何を示すのか不明と言わざるをえない。かなり執拗に精査したにもかかわらず検出されなかった他の柱についても同様である。



第15図 塙口ノ一遺跡B地点  
第1号掘建柱建物址実測図

伴出遺物は決して多くはないけれども小破片だが、土師器、須恵器、灰釉陶器が認められる。

#### ◎第2号掘建柱建物址 (SB02)

調査区域の西端に検出された。第1号掘建柱建物址と同様に全柱穴は見つからなかった。残存する5ヶの柱穴 (SK03, 04, 06, 14, 15) から、桁行2間で間柱をもたない構造の建物が想定できるが、梁間についてはついに不明であった。柱間は180cm (6尺) である。3ヶ残る南北柱列を基準に方位を求めるとき、N-17°-Eとなり、かなり東に振って建てられている。

遺物としては、土師器壺の内面黒色処理されたものが目立ち、須恵器、灰釉陶器も土師器に比べると少ないながらも伴出している。

#### ② 溝址 (SD01)

##### ◎第1号溝址 (SD01)

調査区域の東端で検出された小規模の溝址である。幅20~35cm、深さ平均13cm、長さ約5.

4mをはかる。周辺にピット群があり、一部のピットとは切りあっている。緩く弯曲し、やや東に振った方位をとる。底部の南端と北端ではレベルに約20cmの差があり、覆土は砂質気味ではあるが、水が流れられた形跡は認められない。

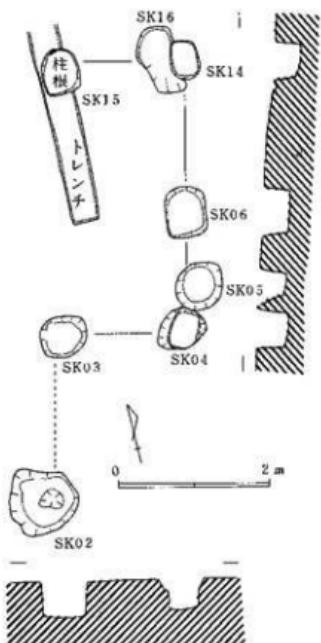
遺構内からの遺物の出土はなかった。周辺からは、土師器、須恵器、灰釉陶器が相当数出土している。

#### ③ 土壙、ピット

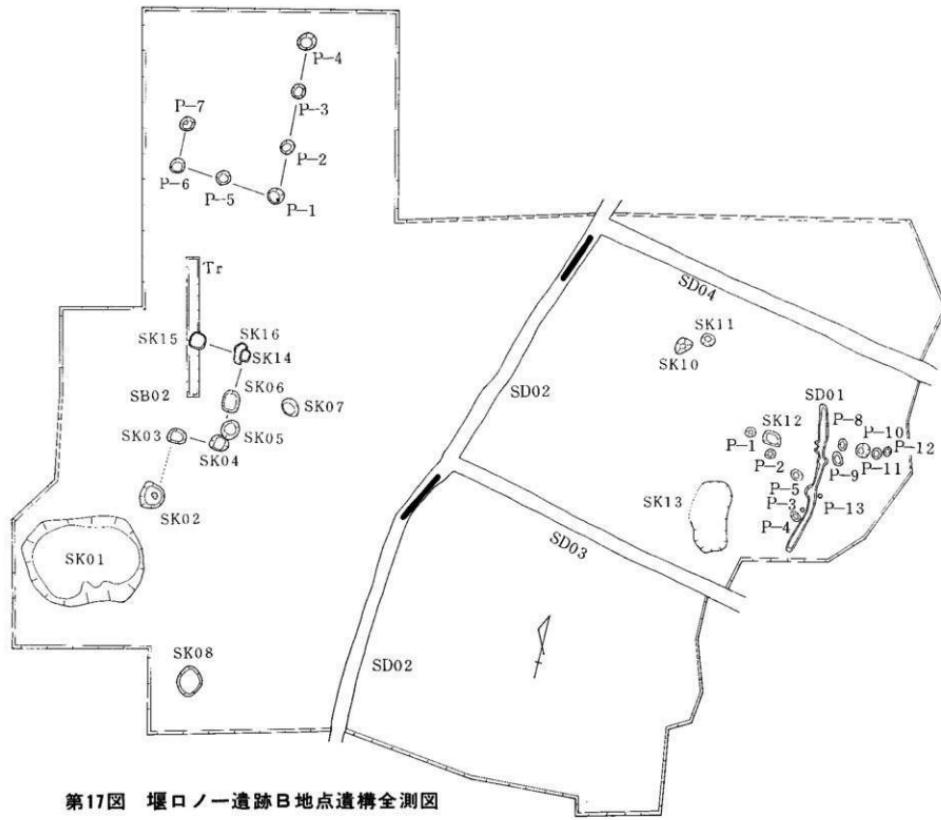
調査区域の面積からは決して多いとは言えないが、それでもかなりの数の土壙やピットが検出されている。しかし、そのうちのいくつかは第1、2号掘建柱建物址の柱であり、残る数はあまり多くない。

##### ◎第1号土壙 (SK01)

調査区域南西隅に検出された大型の土壙である。平面ブ



第16図 墓口ノ一遺跡B地点  
第2号掘建柱建物址 (SB02) 実測図



第17図 堤口ノ一遺跡B地点遺構全測図

ランは隅丸長方形ないし楕円形で、東西4.2m、南北3.0m、深さ約10cmをはかり、東西に長軸をもつ。底部直上に薄い炭化物層があり、葉らしい禾本科植物類の炭化物が多く認められた。

出土遺物は、土師器、須恵器の壊破片を主にかなりの量がある。乱雑に投げ込んだような出土状態で、このことと前記の炭化物層の存在がこの土壤の性格を物語るのかもしれない。

#### ◎第2号土壌 (SK02)

第2号掘建柱建物址と第1号土壌に挟まれて存在する。上面では略円形の平面形を示し、南北95cm、東西90cmをはかるが、底部形状は隅丸方形を呈する。底部までの深さ約15cmである。底部には更に径約25cm、深さ約7cmのビットが掘られている。ここに木質が遺存しており、柱根安定の施設と考えられ、第2号掘建柱建物址と関連させることもできる。

伴出遺物は少量で、土師器、須恵器の破片が僅かに出土したにすぎない。

#### ◎第13号土壌 (SK13)

調査区域の東隅、第1号溝址の南西近くに検出された。長軸を南北にもち、南北2.5m、東西1.3mをはかる隅丸長方形の大きな土壌である。その規模に比して深さは浅く、中央部東西セクションで約10cmをはかれるだけである。覆土は1層で、灰白色の灰層であり、それがこの土壌の性格を物語るものであろうが、それ以上は不明である。

土師器、須恵器の主に壊の小破片が少量出土している。

#### ◎ビット群

調査区域東北隅、第1号溝址周辺に検出された13ヶよりなるビット群である。集中しているものの、特別規格性もなく、乱雑に所在している。規模は径15~50cmまでまちまちであり、径30~40cmのものが最も多いようである。深さは概して深いものが多く、最高50cmのものまであるが、15~20cmが平均である。

第1号溝址同様、遺構そのものからの遺物の出土は殆どないけれども、その周辺や検出面上の包含層出土の遺物が比較的多いので、所属時期を類推することができる。

## (2) 近、現代の遺構

### ① 暗渠排水路

水田の水抜き用の見事な暗渠排水路が現れた。通称「水道」と呼ばれているこの施設はこの辺の水田には普通に見られるものだが、丸太を二つ割りにし中をくりぬいて作られた立派な「水道尻」が二つも出てきたので、ここにあげておいた。この暗渠排水路もその構造により変遷を辿ることができ、この例のようなものはそれほど古いものでもないようである。

## 2 出土した遺物

### (1) 縄文時代の遺物

この時代の遺物には、中期土器2、3点と石斧、石鎌それぞれ数点がある。南方30mの地点からはかつて中期中葉の土器が出土しているので、今回の調査でも該期土器の出土が期待されたが皆無に等しい出土量であった。

### (2) 歴史時代の遺物（第18・19図）

平安時代に属する土師器・須恵器・灰釉陶器・土錘などと、中世後期の土師質土器・陶磁器などが出土している。遺物量はかなり多いが検出遺構が多くないので、遺構に伴うものは少なく大部分は包含層出土である。

#### ① 土師器（第18図-1~3、5~7、11、12）

环（1~3・5・11）は高台の有無で2種類に分けられる。高台も通常の高さのものとやや高いものとがある。11は尖った高台をもち、底部から直線的に強く立ち上がる器形で環通有の形状とは異なるものである。1・5・11は内面黒色研磨されている。3の底部には刻書が認められ「根」と判読できるものである。底部は全て右回りの回転糸切り底で、高台はそこへの付高台である。

环蓋（6・7）には2種類あり、つまみの形状によって分けることができる。いずれも須恵器の模倣品で、6はつまみが擬宝珠に近く高いものであり、7は低く偏平なものである。7の内面は环の内面同様に黒色磨研処理がなされている。

甕（7）は小型のもので最大径を胴部にもち、緩い「く」の字状の頸部から一端外反しながら口縁部に向かうが、口唇近くで内寄する。肩部はなで肩である。

#### ② 須恵器（第18図-4・10~18）

环は一点のみ図示したが、少し無理をすれば1/2くらいは図上復元できそうなものまで数えると出土点数は相当なものになる。4は唯一図上復元できたもので、3/5程が残る。底部はヘラによりロクロから切り離され、その後ヘラ削りされているがやや雑な整形である。胎土、焼成とともに良好であり、内外面とも明灰色を呈し重ね焼きによる火擣がかかっている。

环蓋の3点（10~12）はいずれもそのつまみの形状が異なるもので、10は比較的高いつまみをもち、擬宝珠に近い形を示すが既につぶれかけており、11はかなりつぶれその形から擬宝珠をうかがうことのできなくなったもの、12は更に偏平になってつまみとしての機能はむしろ果たしにくいものである。口縁部は小破片のみのため図示するに至らなかったが、観察によるとしっかりと屈曲して稜をもち嘴状を呈する口唇部に至る形態のものが多いようである。

壺（17・18）は口縁部から胴上半部までを欠き、底部と胴下半部を図示できた。おそらく長頸壺であろう。2点とも安定した高台をもち、17は断面蹄形の特に安定性の高い形を示す。内外面とも灰色ないし青灰色を呈し、17は内面底に自然釉がかかる。

甕（13~16）は口縁部と底部から胴部にかけてのものを示した。13は緩く外反する長い頸部をもち、口縁部に至り強く外反するもので、焼成堅致であり灰色基調の色調の上に内面は自然

釉で緑黄色を呈する。14の頸部は強く外反し、外面は一部に自然釉がかかり暗灰色である。16は内面にロクロ水挽痕をはっきりと残す。

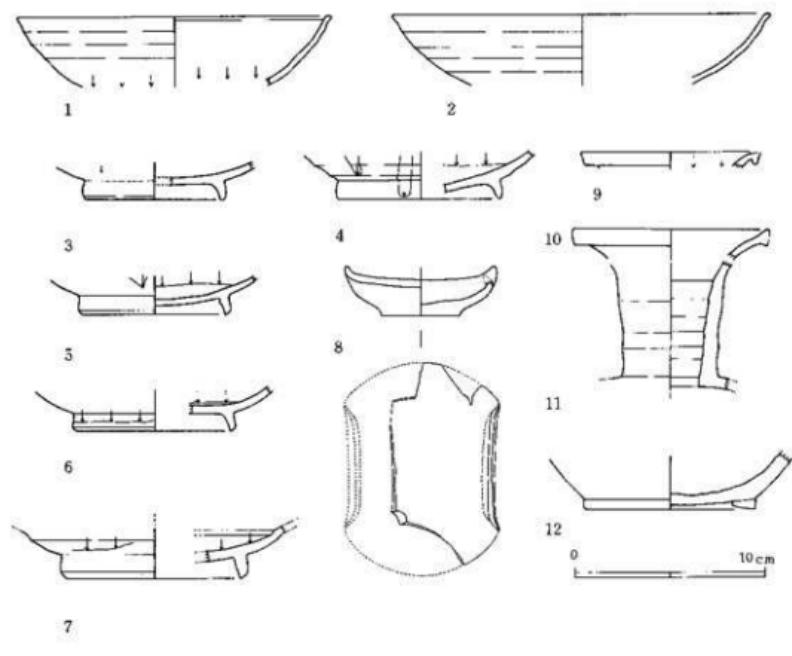
以上の外に須恵器としては、肩部に一条の凸帯をめぐらしてその所々に突起をもつ四耳壺破片も出土しているが、図示できなかった。

### ③ 灰釉陶器（第19図）

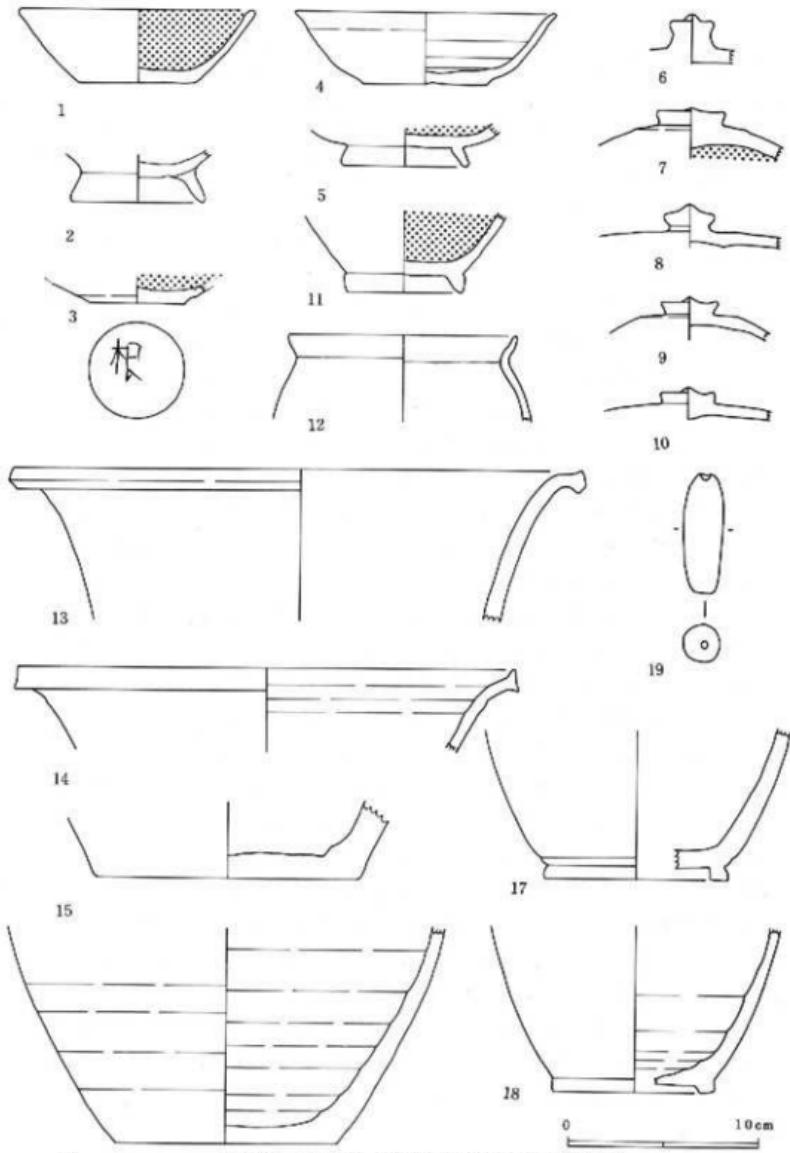
碗（1～6）は全器形の知れるものはない。1・2は底部を欠くが、口径の大小にかなりの差がみられる。2は大型で口径19.7cmをはかる。3～6は底部と体下半部であり、その断面形状にはおのおの差異があるが、高台は全て弱く外に向けて開きながら端部では内弯気味に尖るという共通性をもっている。釉薬は淡緑色ないし緑灰色を呈し、2のように無釉のものもある。

皿（7・8）には2種類があり、内面に段をもつ所謂段皿（7）と、口縁端部を折り曲げた耳皿（8）とがある。段皿は底部径約9cmの比較的大型で、高台の形態は碗の場合と共通している。耳皿は高台をもたず、底部には右回りの回転糸切り痕が明瞭に見られる。

瓶（9～12）は胴部を欠くがその上下の口頸部と底部を図示できた。9の内面には濃緑色、10には淡緑色の釉薬がかけられている。



第18図 堀口ノ一遺跡出土の遺物（2）



第19図 堪ロノ一遺跡B地点出土の遺物（1）

### 3 まとめ

堰口ノ一遺跡B地点は、すぐ南30m程の地点で、昭和52年に市立西塙田保育園建設に際して縄文土器が出土し、1個体が復元され、中期の勝坂式期初頭に比定されているので、今回の調査においても該期の遺物及び遺構の発見が期待された。しかし、調査の結果は期待に反し縄文時代の遺物はごく微量で、遺構は全く検出されなかった。それとは逆に、平安時代中後期に比定される遺物は多く、それとともに遺構も、遺物の量の多さにしては決して多いとは言えないが、いくつかが検出されている。ここでは、平安時代に属する遺構及び遺物についてまとめ、B地点の性格を考えておきたい。

遺構としてあげなくてはならないのは2棟の掘建柱建物址である。2棟ともかなりの精査にもかかわらず、また、他の遺構と重複しているのでもないのに、全体の検出にいたらなかったもので、このままだと建物にならないのではないかと考えざるをえないものである。しかし、そのプラン及び1本だけではあるが柱根の良好な遺存などから、建物以外の想定もまた離しい。が、もし建物であるとしても、第1号掘建柱建物址のように、南北柱列と東西柱列が直交しないという問題も存在する。極端に言うと、僅かであっても平行四辺形のプランになってしまうのである。そしてまた、A地点の第1号掘建柱建物址のように変則的な建物を想定せざるをえなくなる。第2号土壇はその構造及び木質の遺存から柱穴とみてよいもので、第2号掘建柱建物址の一部とすることも可能だが、そのようにしても変則的であることに変わりはない。一方、方位的には少し東に振って建てている共通性が認められる。A地点の第2号掘建柱建物址も同様で、その角度に少しずつの違いはあるが、傾向として捉えてよいと思われる。この2棟の建物址の所属時期は、土師器、須恵器、灰釉陶器の共伴の事実から、10世紀前半が考えられよう。

遺物は、この時期の標準的なものは一応揃っており、特に特殊なものはない。あえてあげるならば、灰釉陶器が量的にやや多いことと、上田小県地方2例目の灰釉陶器耳皿の出土がある。灰釉陶器は、壺、瓶、碗、長頸瓶及び耳皿があり、全て美濃窯と考えられるものばかりである。時期的には美濃窯のうちの光ヶ丘1号窯式期から大原2号窯式期に比定され、実年代としては10世紀前半から後半が与えられるが、量的にはどちらかというと、10世紀前半の光ヶ丘1号窯式期と考えられるものが多いようである。このことは、B地点の盛期について考えるときに重要なが、須恵器がまだ比較的多く残っており、須恵器消滅以前に位置づけられることと矛盾しない。灰釉陶器耳皿は、回転糸切りの底部径が小さく、高台を持たないやや変わった形のもので、光ヶ丘～大原という時期の10世紀中頃の年代を与えることができよう。

ともあれ、堰口ノ一遺跡B地点は平安時代中期を中心と展開されたことがわかった。検出された掘建柱建物址は不確定な要素が多いながら、A地点のそれとも関連性が考えられ、これからの研究の一資料となりうるものである。出土した灰釉陶器なども、指標となりうる好資料を提供することになった。

## IV C 地点の調査

### 1 検出された遺構

#### (1) 弥生・古墳時代の遺構

##### ① 第1号竪穴遺構 (SK18)

調査区域南東隅に検出された不整形な遺構で、西隅を第1号集石遺構 (SX01) により、南東辺を第1号暗渠排水路により、北隅を灰色粘土を用いた遺構により僅かながら壙されているが本来は略台形の平面形を呈すると思われる。長径5.6m、短径4.5m、深さ9~28cmをはかる。初めは竪穴住居址と思われたが、プランが不整形すぎること、柱穴や炉またはカマドなどの屋内施設が全く認められることなどから、竪穴遺構とした。

出土遺物には比較的まとまった資料があるが、第1号集石遺構と重複し合うことから遺物も混在しており、両遺構とも所属時期を同定しがたい。弥生時代の遺物としては、後期後葉から終末期にかけて見られる特徴をもつ甕があり、数個体に分けられる。そのうちでは、櫛描文施文に用いた櫛削状工具により刷毛目状文様を施文した甕が特に特徴的である。古墳時代に属する遺物は古式の土師器であり、赤色塗彩された壺、有段口縁の壺や甕などが出土した。

#### (2) 平安時代の遺構

##### ①溝址 (SD01, 02)

###### ○第1号溝址 (SD01)

調査区域の南端から中央部にかけて、幅20~35cm、深さ平均約10cmの小規模の溝が、途中2ヶ所で屈曲しながら凡そ14.5m続いているのが検出された。南端と北端では底部のレベル差が約10cmで、長さに比して勾配が小さいが、覆土の状態から明らかに水が流れた痕跡が認められる。北端は不明瞭であり、消滅する。

遺構内覆土からの遺物の出土はなかった。

###### ○第2号溝址 (SD02)

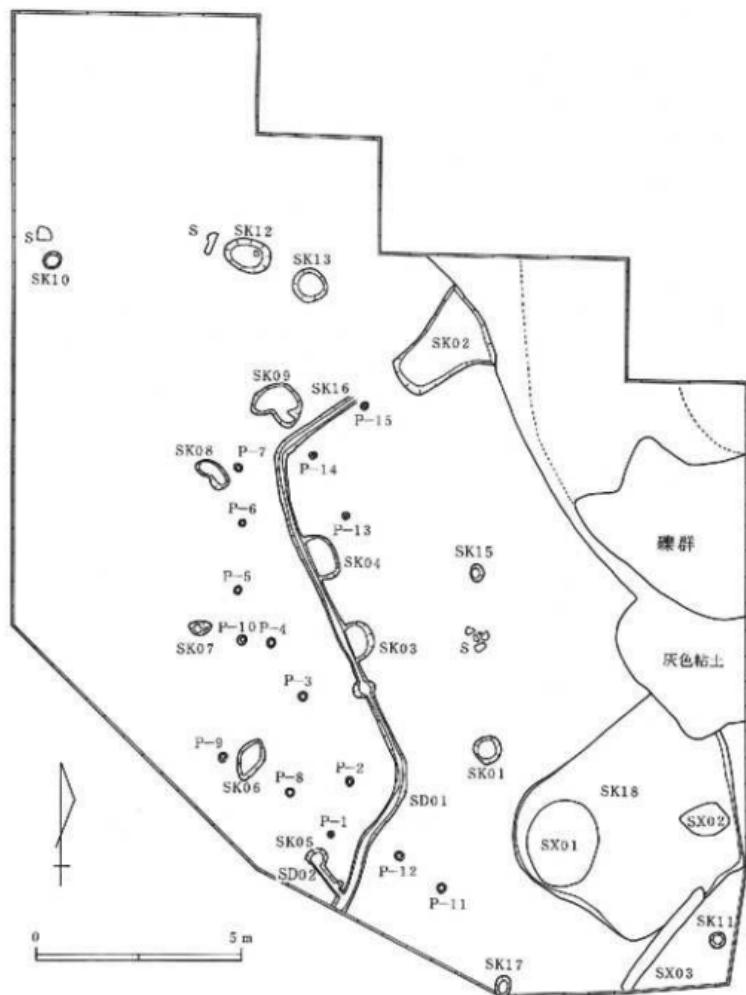
第1号溝址南端から枝分かれするような形で検出された。その先端は丸く膨らみ土壙状であるが、本来の形状なのか土壙と重複しているものなのかは不詳である。幅約20cm、長さ1.3m、深さ平均7cmをはかる。幅、深さなど近似する値を示すので、切り合い関係ではなく分歧させたものとみられる。

第1号溝址同様、遺物の出土はなかった。

##### ② 土壙

###### ○第1号土壙 (SK01)

調査区域南東部で検出された。やや南北に長い略円形の平面プランを呈し、南北約65cm、東西約60cm、深さ約13cmをはかる。覆土は2層よりなり、II層(下層)は黄白色粘土層で意図的に土壤底部へ敷き詰めたものようである。I層(上層)は黒褐色土層だが、長径14cm



第20図 堪口ノ一遺跡C地点全測図

の偏平な石が、これも意図的に据えられているような在り方をしている。

出土遺物は、口縁部を欠くだけでほぼ完形の灰釉陶器長頸瓶1点あるのみである。北側に凡そ45°傾いた形で出土した。

#### ◎第2号土壙 (SK02)

第1号溝址の北端につながるような形で、調査区域の北東部に検出された。南西—北東に主軸をもつ平面形を呈するものと思われるが、北東側は他の遺構により切られている。残存規模は、長径2.5m、短径1.1~2.2m、深さ7~14cmをはかる。

遺物の出土は比較的多く、土師器壺が大部分で、須恵器壺も少量ながら含まれている。

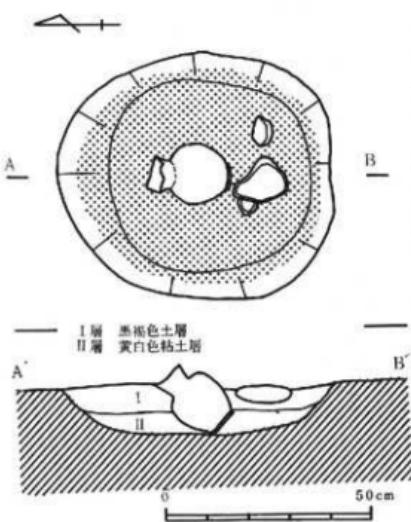
#### ◎第9号土壙 (SK09)

第1号溝址北端の北西脇に検出された。東西方位に長軸をもち、不整形な橢円形を呈する。南東部は第16号土壙と重複し合う。

出土遺物は多く第2号土壙同様、土師器壺が殆どであり、高台をもたない内面黒色処理されたものに限られている。

#### ◎第12号土壙 (SK12)

橢円形プランの土壙で東西に主軸をもち、長径108cm、短径77cm、深さ15cmをはかる。西側20cm離れた所には、長さ45cm、幅15cmの石が土壙主軸に直交する形で存在し、東側には15cm離れて径30~35cmの焼土がある。この3者が一体をなすものか否かは不明であるが、何らかの関連性があるものと思われる。



第21図 第1号土壙実測図

遺物は土壙そのものよりの出土より、土壙と西側の石とに挟まれた部分からの出土が多く、殆どを土師器壺が占める。

#### ◎第13号土壙 (SK13)

第12号土壙の東側に隣接して検出された。径75~80cm程の円形土壙で、深さ15~20cmをはかる。大小さまざまな石が数個意図的に入れられていた。

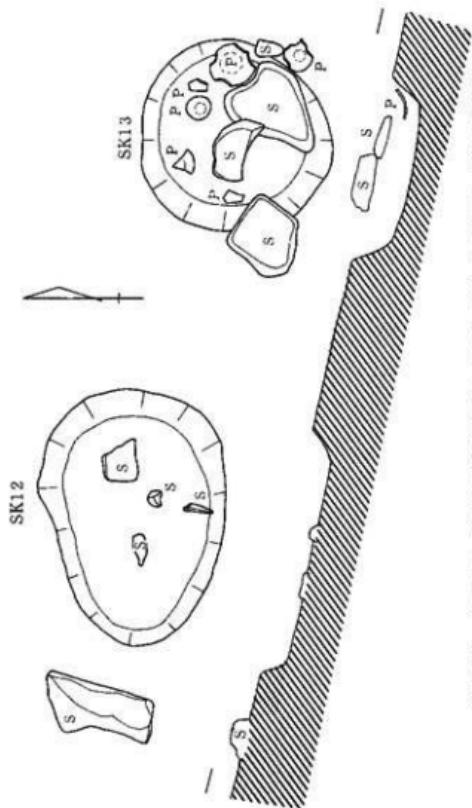
出土遺物は多く、殆ど全てが高台をもたない土師器壺であり、全てが内面黒色処理されているものである。一般的な形のものから口径18.8cmの特大のものまでが、その大小やフォームにより数種に分類できる。

#### ◎第3、4号土壙 (SK03, 03)

第1号溝址の中央辺で溝址に付随する形で検出された。ともに溝址の東側に存在し、長さ90cm (SK03)、110cm (SK04) をそれぞれ

ばかり、幅は2基とも約60cmであり、溝址よりもやや浅い。

出土遺物は少ないが、第4号土壙より土師器坏破片が数点出土しており、この土壙の時期決定の資料になると同時に、遺物の出土が荷無だった第1号溝址の所属時期を求める上でも欠くことのできないものである。



第22図 堀口ノ一遺跡C地点第12、13号土壙 (SK12、13) 実測図

## 2 出土した遺物 (第23・24図)

### (1) 弥生時代の遺物

第1号竪穴遺構 (SK18) とそれを切る第1号集石 (SX01) を中心にいくつかの弥生土器が出土している。図示するには至らなかったが、殆どが模描文が施された甕で、模描きによる典型的な簾状文と波状文を施文したもののがほかに、模描文施文と同じ模描状工具により刷毛目状文様を施文した甕脛部破片がある。脛部には通有の簾状文が施されており、脛部に波状文に代えて間隔を少し開け斜位に刷毛目状文様を施したものである。このほか、恐らく数個体に分けられると思われる。

### (2) 古墳時代の遺物 (図23図-1, 2)

弥生時代の遺物とほぼ同じ地点から出土した。1は有段口縁壺の口頭部で、口唇部に向かって強く外反し、一方では棱をもって段をなしくびれに向けて取締する形状を呈する。外面の段は明瞭だが、内面はあまりはっきりしない。2は口縁部を欠失している壺で、頭部、体部、底部が残っているが、頭部と胴上半部が図示できた。なで肩で膨らんだ脛部をもち、口縁部は1と同様に有段口縁だったように見える。くびれ部では口頭部と体部の接合の後細かい刷毛により表面調整がされており、また、外面全面と内面の頭部までが赤色塗装されている。このほか、図化しなかつたが赤色塗装された器肉の薄い壺、頭部くびれが強い「く」の字状を呈する甕が出土している。

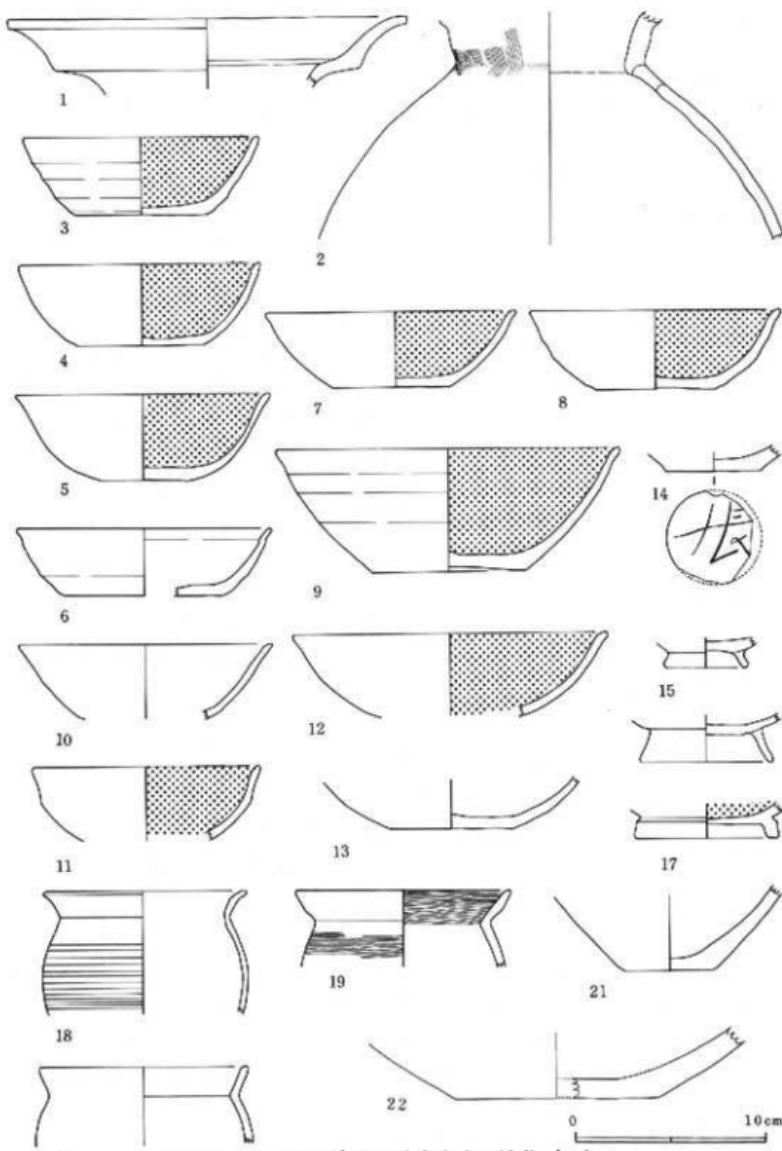
### (3) 歴史時代の遺物 (第23図-3~22、第24図)

この時代に属する遺物としては、平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器、中世後期の土師質土器、陶磁器などがある。この内第13号土壙 (SK13) からは多くの土師器が出土し、とりわけ环が多いという特徴がある。

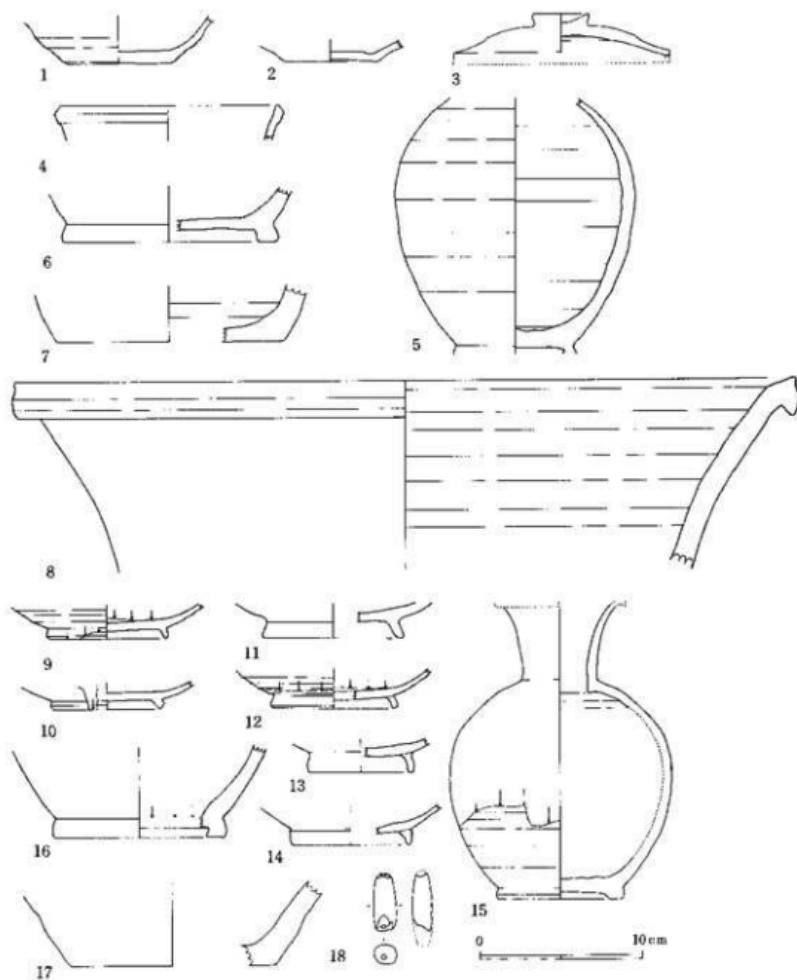
#### ① 土師器 (第23図-3~22)

环 (3~17) は6・14・16以外全て内面黒色研磨されており、図示できた内の80パーセントを占める。これは一つの傾向を示すものと認めることができよう。また、底部を欠損しているものを除いても底部形状にも際立った傾向が見られる。高台をもつものは極めて少なく、1/4しかない。一方、大小や断面形状により分類が可能であるし、高台の高低によっても分類することができる。1点のみだが、1.8cmの足高高台も出土している。14は高台をもたない底部のみの破片で刻書が認められ、俄に判読は難しいものの、造りは「長」と読むことができる。なお第13号土壙 (SK13) からの出土遺物は7~9であり、そのうち9は口径18.8cmの大型品であり、环というより碗に分類する方が妥当と思われるものである。また、10は第1号溝址に伴う第4号土壙からの出土で、遺物の寡少な第1号溝址にとって、その所属時期を推定するに当たり欠かすことのできない貴重なものである。

甕 (18~22) には小型のものから中型・大型のものまで3タイプがある。小型のもの (18~20) は口頭部の形態がそれぞれ異なり、くびれはいずれも強くないが、口縁部で外反するもの、直



第23図 墓口ノ一遺跡C地点出土の遺物(1)



第24図 塚口ノ一遺跡C地点出土の遺跡（2）

線的に開くが中程で肥厚するもの、立ち上がり弱く直線的に開くものが見られる。外面に平行沈線をもつもの、刷毛目をもつものがある。口径は11cm内外で近似した値を示し、一定の共通性をみとめることができる。大型のものは2種に分けられ長胴形の胴部に統くものと、底部から強く開いて立ち上がり胴部が大きく膨らむものとがある。

#### ② 須恵器（第24図-1～8）

壺（1・2）は全器形の判明するものがない。2点とも回転糸切り底のごく一般的なものである。

壺蓋（3）は口縁部を欠失しているものの全器形をほぼ復元できるもので、口径13.3cmを有する。非常に精選された胎土で焼成も良好で堅緻であり、灰色茶調の色調を呈し外面全面に灰黒色の自然釉がかかる。全体的な感じは須恵器というより灰釉陶器に近いものである。

壺（4～7）の内4は直立気味の口縁部に面取りをして嘴状に尖った口唇部をもつもので、直口壺であろう。7は口頭部を欠くが体部と底部の全体を復元できるもので、倒卵形の体部に安定性の良い高台が付けられた器形を呈する。外面とも灰色で内面にはロクロ痕が明瞭に残る。

甕（8）は大甕の口頭部であり、口径48.3cmをはかり、長い頸部をもつ。胎土、焼成ともに良好であり堅緻で、灰色ないし黄灰色の色調を呈し一部に乳白色の自然釉がかかる。

#### ③ 灰釉陶器（第24図-9～16）

碗（9～14）と瓶（15・16）がある。碗は底部径の大小、高台の形態、胎土、釉薬の様子などにより細分が可能である。このうち高台について見ると、強く開くもの、内弯気味に開くもの、直立するもの、高いもの、低いものと、その形状は様々であり全てに共通する要素はあるが見当たらない。B地点において見られた高台端部が内弯気味に尖る傾向が認められたのとは対照的である。

瓶の内16は第1号土壙中の黄白色粘土の上に斜めに倒れた状態で出土したもので、何か特殊な用途が考えられるものだが、口縁部を僅かに欠くのみで他は完存している。よく整った球形の体部にあまり高くないが安定性の良い高台を付け、内面頭部までと外面は体部中程までに緑灰色の釉薬を施釉し、一部は薄いコバルト色に発色している。釉薬は外面で一部剥落も見られる。15は16に比し大型のもので、胎土がやや粗く、高台には焼け垂みが見られる。

#### ④ 土師質土器（17）

胎土に細砂粒を多量に含み外面ともざらつき、内耳土器と共通するものであるが、器形が相違しており、底部から外開きに立ち上がる形態を示す。内面明茶褐色、外面は煤が付着し黒褐色を呈する。

### 3 まとめ

堰口ノ一遺跡C地点は、今回調査したA～Dの4地点の内最も北に位置する。微地形的にはすぐ南に隣接する通称「大城」地籍が微高地であるのに対して低地である。

検出された遺構としては、溝・土壙・竪穴遺構・集石遺構・ピットなどがあり、この中で特に第1号溝址（SD01）・第1・2・13号土壙（SK01・02・13）・第1号集石遺構（SX01）が遺物との関係で注目される。全ての遺構について触れる余裕はないのでこれらについて僅かな考察をし簡単なまとめとしたい。

先ず第1号溝址（SD01）は南から北へ途中2ヶ所で屈曲しながら流れる水路と考えられる。先端は消滅てしまっているが、方向は第2号1:壙（SK02）に向いており関連性があるかのようである。この溝址に第3・4号土壙（SK03・04）が伴っている。付随して設けられた施設らしいが、性格については不明である。ただ、遺物を出土しなかった溝址にとって、ほんの僅かではあっても10世紀中頃に帰属させられる土器を出土しており、同時に設けられたと考えられるこの土壙の存在は貴重である。また、溝址に沿うように見つかったいくつかのピットは、規模こそ小さいものの溝址に関連した何らかの遺構を作っていたものと考えることができよう。すなわち、防風のための壠状のものや上屨をかけた柱穴などを想定することができる。

第1号土壙（SK01）は、灰釉陶器の長頸瓶を出土しているが、黄白色粘土を敷く構造と遺物の出土状態から特別な性格、例えば祭祀的なものとして考えられうる。ともあれ、出土した灰釉陶器長頸瓶は美濃窯の光ヶ丘1号窯式に比定でき、10世紀前半の年代を与えることのできるものである。遺物が多く注目されたのは、第13号土壙（SK13）である。特に土師器环が大部分を占め、高台をもたず内面黒色研磨されたものばかりである点が特徴で、その辺から遺構の性格が考えられる。

第1号集石遺構（SX01）を中心に弥生時代終末期から古墳時代初期にかけての土器を出土しており、これは4世紀前半から同末頃に位置づけられるもので、遺構そのものの性格は今のところ不明ながら、該期の研究のために今後貴重なものになろう。

出土した遺物としては、特に弥生時代終末期から古墳時代初期にかけての土器、高台をもたず内面黒色研磨された一群の土師器环、10世紀前半の美濃窯産と考えられる灰釉陶器長頸瓶に注意したい。遺構や遺跡の年代を決定し性格を考えるための資料としてばかりでなく、今後この地域における基準資料となりうるものが多いからである。

ともかく、堰口ノ一遺跡C地点は遺構・遺物ともに決して豊富ではないが、弥生時代と古墳時代の端境期の土器の問題、これまでにあまり類例のない溝址と土壙・ピットとの隨伴の問題などどれ一つとっても、これから解決してゆかなければならぬものばかりであり、問題点を多くもった地点であると言える。その意味で、遺跡中心地からは外れている地点と思われるが、貴重な結果とないがしろにできない多くの問題を提供することになった。

## V D地点の調査

### 1 検出された遺構

本地点は堰口ノ一遺跡内において微高地を形成しており弥生～平安期の生活址が期待された。しかし、約20cmの表土下は大小の礫を多量に含む黄褐色砂礫層で、遺構覆土にも多量に礫が混在し、プランの検出、切り合い関係の把握などは困難を極めた。本地点において検出された遺構は、竪穴住居址3軒、土壙14基であるが、一部を除き残存部が浅く、遺物も乏しかった。

#### 1. 竪穴住居址

##### SB01（第26図）

調査区中央、グリッドG-4・5を中心に検出された。プランは460×400cmで南壁が張った長方形を呈し、西壁の2角のみ隅丸となっている。長軸方向はN-12°-Eで、深さは5～10cmと浅く、床面は軟弱で礫が露出し凸凹している。北壁沿いの中央部でわずかに焼土が認められ、カマドの跡かと思われる。柱穴は検出されなかった。また、南壁沿いに125×90cm、深さ15cmの土壙が検出されたが、本址との関係は不明である。覆土は2層に分けられ、上層は黒褐色土、下層は黄褐色土でいずれも砂質で大小の礫を多量に含んでいる。遺物は10世紀前半に比定される土師器、須恵器の小片が若干出土している。（第28図1～4）

##### SB02（第26図）

SB01の北側、グリッドG-7、H-6・7より検出された。本址の大半は調査区域外に在り、N-75°-Wを指す610cmの辺を検出したのみである。残存部の深さは西側で5cm、東側で20cmを測る。床面は礫の露出が激しく、カマド、柱穴等は検出されなかった。覆土は大小の礫を多量に含む黒褐色土で、遺物はプラン検出中に出土した10世紀中葉に比定される土師器の环2点（第28図5、6）の他に銚釜・灰釉陶器の小片が出土している。

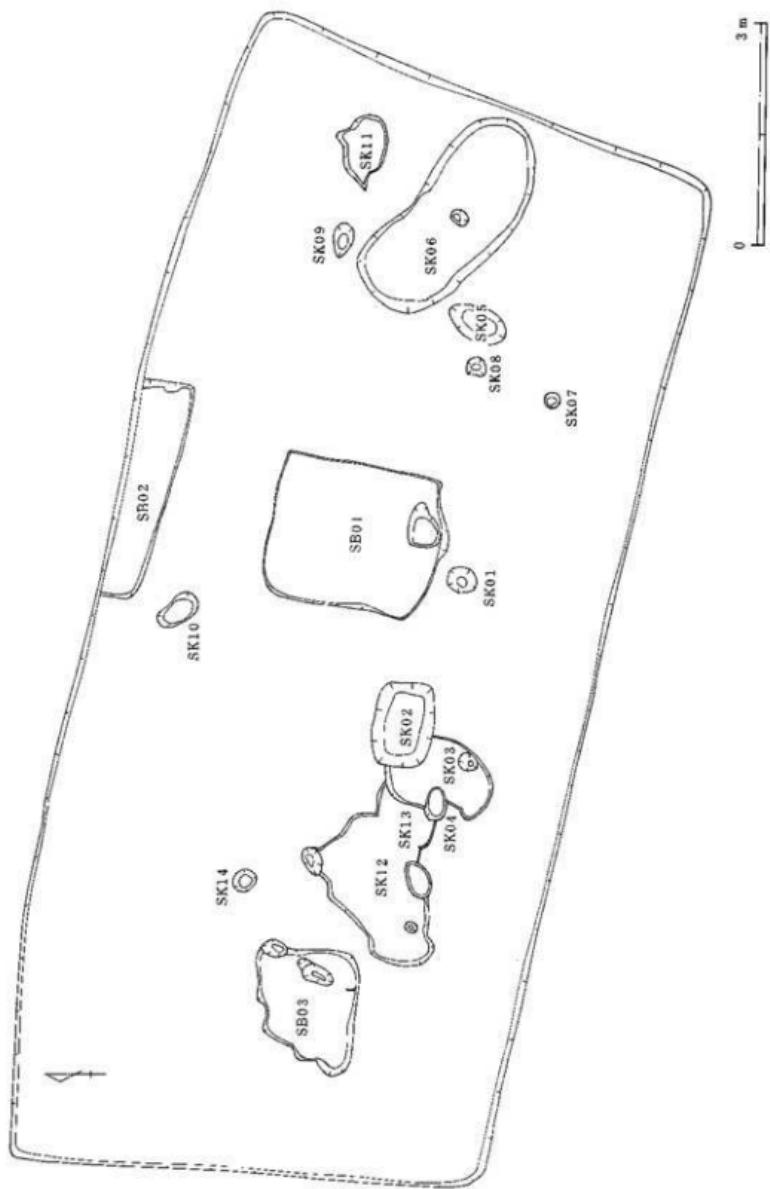
##### SB03（第26図）

調査区西端、グリッドB-4、C-4より検出された。北西部を削平により失われ、残存部のプランは320×280cmの隅丸長方形で長軸方向をN-80°-Wを持つ。深さは3～10cmを測り、床面は軟弱で凹凸が激しい。中央部南寄りでわずかに焼土が認められた。ピットは数ヶ所認められたが明確な柱穴は確認されなかった。覆土は小礫を含む黒褐色土で、遺物は9世紀後葉～10世紀前葉に比定される土師器、須恵器片が出土している（第28図7～16）。

#### 2. 土壙

##### SK01

SB01の南側、グリッドG-4より検出された。プランは長軸方向をほぼ南北に持つ93×70cmの精円形で、深さ43cmの尖底状を呈する。覆土は河原礫を含む黒褐色土で、遺物は全て土師器で小形甕（第29図17）の他に球形胴の小形甕（堆？）なども出土しているが小片で図示出来ない。5世紀後半の所産と思われる。



第25図 堀口ノ一遺跡D地点全測図

#### SK02 (第26図)

グリッドE-4、F-4にまたがってSK03を切って検出された。プランは245×155cmの胴張り隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-80°-Wを指す。底面は西側で80×55cmの長円形に約5cm深く掘り込まれ、掘り込み部を除く底面にはわずかに赤味を帯びた黄褐色粘土を貼り壓緻で平坦にしている。断面形は鏽底状を呈し、深さは50cmを測る。覆土は大小の河原礫を多量に含む黒褐色土で、砂質ではあるがよく締っている。遺物はほとんどが弥生時代後期後葉の箱清水式土器（第29図18~26）であるが、弥生時代の終末期~古墳時代初頭期の高坏（器台？）の脚部片（第29図27）が1点出土している。

#### SK03 (第27図)

グリッドE-3・4より検出され、SK02、SK04、SK13と重複関係を持ち、SK02、SK13に切られている。プランは長軸方向をN-12°-Eに持つ315×200cmの不整橢円形を呈する。深さは7~10cmを測り、底部は礫が露出し、やや凹凸している。また、南東部に60×55cm、深さ16cmのビットが存在するが本址との関係は不明である。壁はほぼ直に立ち上がり、断面形はタライ状を呈する。覆土は拳大の河原礫を含む黒褐色土で、遺物は弥生時代後期後葉の箱清水式土器の小片が約20点出土したのみである。

#### SK04 (第27図)

SK03、SK13と重複してグリッドD-4に検出されたが、両遺構との関係は不明である。プランは100×65cmの楕円形で、深さ10cmの丸底状を呈する。出土遺物はない。

#### SK05

グリッドI-3・4にまたがって検出された。プランは150×96cmの卵形で、長軸方向はN-36°-Eを指す。深さは25cmで、南側が一段深くなっている。出土遺物はない。

#### SK06 (第27図)

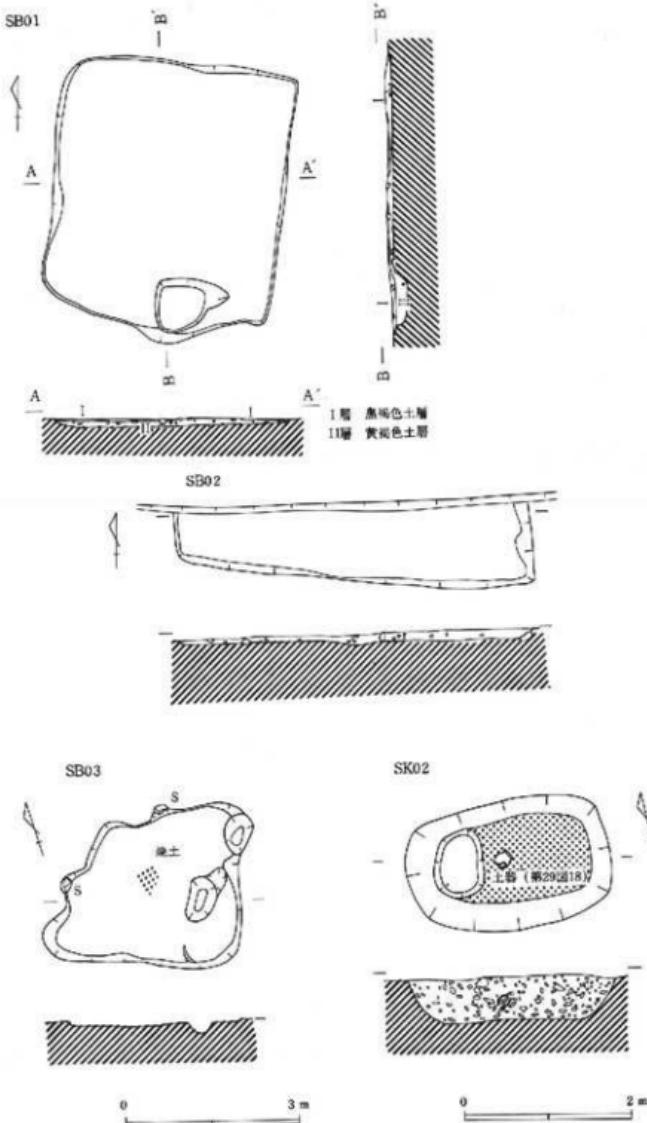
調査区東側中央部、グリッドI-4・5、J-3・4、K-3・4にまたがって検出された。プランは中央部で曲がった長円形を呈し600×270cmを測る。全体の長軸方向はN-50°-Wを指す。底面は軟弱で礫の露出が激しいが全体的には平坦である。深さは25~35cmを測り、壁はほぼ直に立ち上がる。中央部と西部にビットが存在し、特に中央部のビットは50×45cm、深さ23cmを測る。覆土は2層に分けられ、上層は人頭大から拳大の河原礫を多量に含む黒褐色土、下層は拳大の河原礫を含む黄褐色土である。遺物は弥生時代後期後半の箱清水式土器（第29図28~30図32）と石包丁の完形品（第30図43）が1点、他に流れ込みと思われる須恵器の坏（第30図44）が出土している。

#### SK07

グリッドH-3より検出された。プランは径40cmの円形で、深さ16cmの丸底を呈する。弥生土器の甕小片が2点出土している。

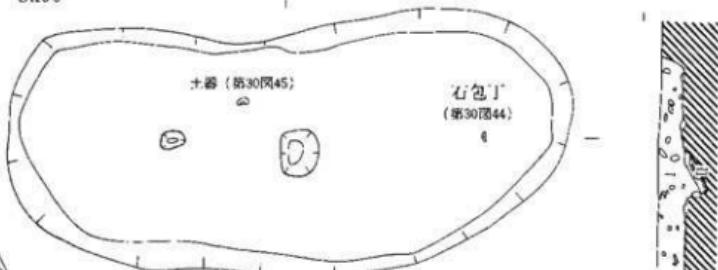
#### SK08

グリッドI-4より検出された。プランは65×55cmの不整円形で、深さ20cmの丸底を呈する。

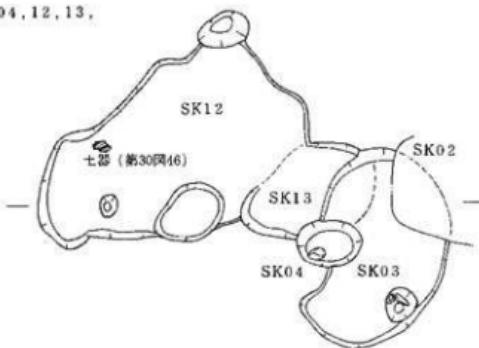


第26図 墓口ノ一遺跡D地点第1-3号住居址 (SB01-03),  
第2号土壤 (SK02) 実測図

SK06



SK03, 04, 12, 13,



第27図 墓口ノ一遺跡D地点第3.4.6.12.13号土壤  
(SK03, 04, 06, 12, 13)実測図



出土遺物はない。

SK09

SK06の北側、グリッドJ-5より検出された。プランは95×56cmの卵形で、長軸方向はN-74°-Wを指す。深さは48cmで尖底状を呈する。覆土は拳大の河原礫を含む黒褐色土である。遺物は弥生土器の甕小片が1点出土したのみである。

SK10

グリッドF-6より検出された。プランは長軸方向をN-30°-Wに持つ長円形で130×74cmを測る。深さは13cmで鍋底状を呈する。覆土は河原礫を含む黒褐色土で、わずかに炭化物が見られる。出土遺物はない。

SK11

SK06の北側、グリッドJ-5、K-5より検出された。プランは東西に長軸を持つ不整形円形で200×140cmを測る。深さは25cmで断面形は鍋底状を呈する。遺物は弥生土器を中心に数点の土師器、須恵器片が出土しているが、いずれも小破片である。

SK12（第27図）

グリッドC-4、D-4より検出された。複数の遺構が重複していると思われるが、検出面が底部に近く、覆土にも多量に小礫が混在している為、明確に出来なかった。全体のプランは440×330cmの不整形で、長軸方向をN-15°-Eを持つ。底部は礫が露出し凹凸が激しく、深さは5~10cmである。覆土は河原礫を含む黒褐色土である。遺物は西部で弥生時代後期後半の高環壠部（第30図45）が重なった状態で出土し、南西部のピットからは5世紀後半~6世紀前半の球形胴の甕片3点が出土した他は、弥生土器、土師器、須恵器の小片が若干出土しているのみである。（第30図46）。

SK13（第27図）

グリッドD-4、E-4より検出されたが残存部に乏しく、覆土に小礫が多数混在しており、全体のプランは明確に出来なかった。しかし、出土遺物からSK02, SK12を浅く切って構築されたものと思われる。残存部の大きさは220×100cmで、深さは2~5cmである。遺物は内面が黒色処理された土師器壺と須恵器壺の小片が十数点出土したが、図示出来たのは土師器壺2点（第30図47、48）のみである。

SK14

グリッドD-6より検出された。プランは65×60cmの略円形で、深さ22cmの丸底を呈する。出土遺物はない。

## 2 出土した遺物

壇口一遺跡D地点より出土した遺物には、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、中世陶器、磁器、石器などがある。しかし、一部の土器、石器を除くと小破片が多く図示出来たものは少なかった。

以下、遺構出土の遺物を中心にして、簡略な説明を行いたい。

### SB01 (第28図1~4)

1は土師器の甕で、口辺部が「く」の字状に外反し、なめらかな頸部と長胴を持つと思われる。2は土師器の坏で、約1cmの内湾する付高台を持つ。3は須恵器の坏で、高台部より直に立ち上がる器形を持ち、底部に火拂を残す。4は須恵器の皿で、3と同様に長方形の安定した高台を持つ。

### SB02 (第28図5、6)

土師器の高台付坏が2点図示出来た。5は口径10.6cmとやや小形で逆爪形の面取りされた高台を持ち、口縁部でわずかに外反する。精選された胎土を用い、内外面に入念な黒色研磨処理が施されている。6は内面のみ黒色研磨され、外面にはやや雑な水引き痕を残している。

### SB03 (第28図7~16)

7は土師器の甕で、「し」の字状の頸部を持つ長胴甕と思われる。8は土師器の坏で、内面が黒色研磨され、口縁部で短く外反する。9、10は須恵器の坏で、直線的に開き口縁部で外反する器形を持ち、法量もほぼ共通する。10には火拂が残る。11~16はC-5グリッド出土の須恵器であるが、プラン精査中の出土であり、本址に帰属するものと思われる。11は短頸壺で「コ」の字状の頸部と肩の張る器形を持つ。口縁部内面と外面肩部に白灰色の自然釉がかかる。12~14は甕であるが、12、13は同一個体の可能性がある。12は面取りされた口縁部で、13は大きく張った高台を持ち、自然釉がかかる。15、16は坏で、直線的に開く器形を持つ。

### SK01 (第29図17)

土師器の小形甕が1点図示出来たのみである。17は短く強く外反する口縁部と、わずかに肩の張る球形胴を持つ。外面と内面口縁部に浅く備目を残し、胴部内面はナデが施される。

### SK02 (第29図18~27)

18~26は弥生時代後期後半の箱清水式土器の範疇に含まれる土器である。18~23は甕で特に18は本址中央部よりほぼ原形を留めて出土したものである(第26図)。弓状に外反する口縁部と、あまり肩の張らない胴部を持ち、頸部に2~3回止めの簾状文を左回りで施文した後、口縁部に2条、胴部に7条の波状文を右回りで施文している。胴下半部と内面には細かなヘラミガキが施され、内面はさらにナデが行われている。簾状文と波状文は7本単位の同一の攝齒状工具が使用されている。19は口縁部が内湾し、風化も著しいところから、SK03を本址が切った際に混入した可能性もある。20、21は波状文の下に刷毛目を残している。22、23は同一個体と思われ、太くて乱れた波状文が施文されている。24は壺の底部で、外反しながら立ち上がる器形を持ち、外面は

人念なヘラミガキが行われているが、内面表層は剥落している。25、26は同一個体の高環と思われ、口唇部に山形突起が付けられ、脚部には3角形の透し窓が3ヶ所開けられている。脚部内面を除いて赤色塗彩が施される。27は弥生時代終末期～古墳時代初頭期に東海西部地域の土器の影響を受けて出現するとされる高環の脚部で、ヘラミガキが施されているが、赤色塗彩は施されていない。

#### SK06（第29図28～第30図44）

28～42は弥生時代後期後半の箱清水式土器である。28～37は甕で、乱れた波状文の施文されたものが多い。28、29は頸部片で簾条文が施文されている。30は波状文の下に刷毛目を残している。32～34は同一個体と思われる。施文に用いられている櫛歯状工具は5、7、9本単位が使用されている。38は甕の頭部片で7本単位の櫛描T字文が施文されている。39、40は高環で、39はゆるやかに内窓しながら開き、口縁部でなめらかに外反する環部で、40は長くラッパ状に開く脚部である。脚部内面を除いてヘラミガキの後、赤色塗彩が施されている。41は深鉢の底部で内外面共、ヘラミガキの後、赤色塗彩が施されている。42は底部の風化が著しいが、1孔を有する甕と思われる。小径の底部から直線的に開き、内外面にヘラミガキが行われ、無塗彩である。43は頁岩製の石包丁で完形品である。1孔を有する半月形で、全体によく研磨され、刃部は磨滅が著しい。44は覆土上層より出土した須恵器环でヘラ記号と火摩を有する。

#### SK12（第30図45、46）

45は弥生時代後期後半の高環で、接合部以下を欠損するが、環部はほぼ完存する。内窓しながら開きゆるく屈曲した後、弧を描いて外反する。口唇部には山形突起を2（4？）ヶ所に持つ。内外面共に赤色塗彩が施されている。46は土師器の有段口縁壺かと思われるが小片で風化も進み、明確ではない。

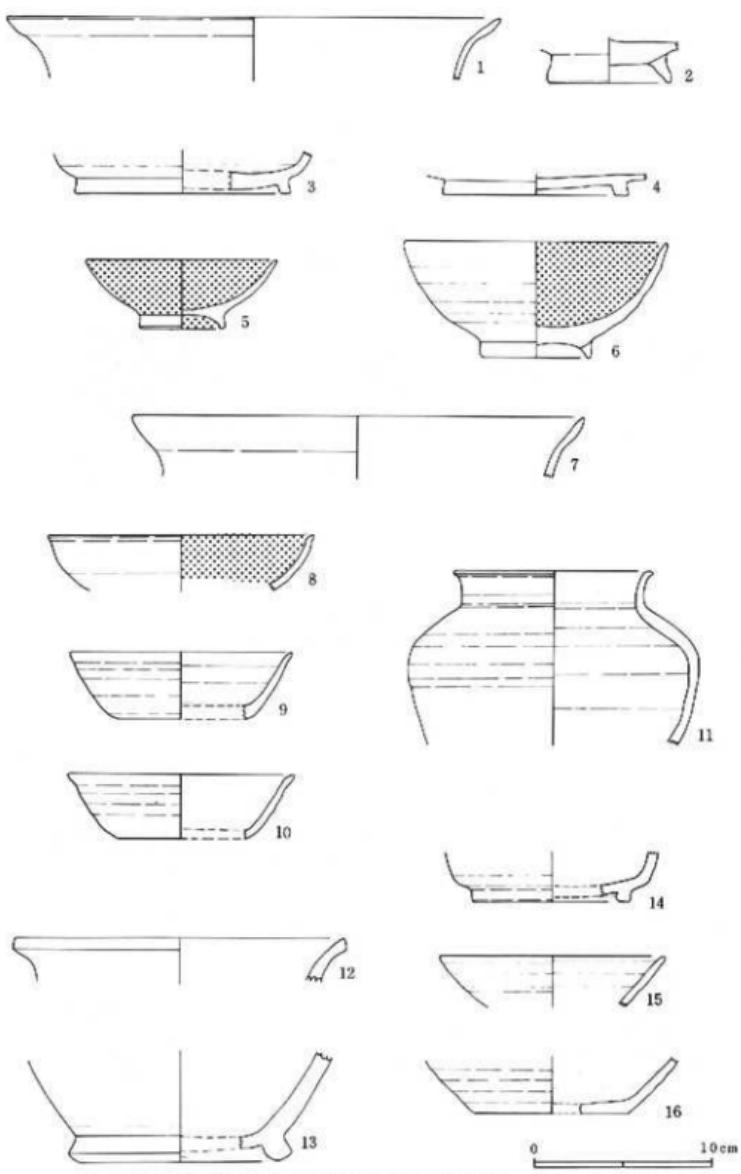
#### SK13（第30図47、48）

いずれも内面が黒色磨研処理された土師器の环である。47は静止ヘラ切りの後、底部周辺よりヘラ削り調整を加えている。

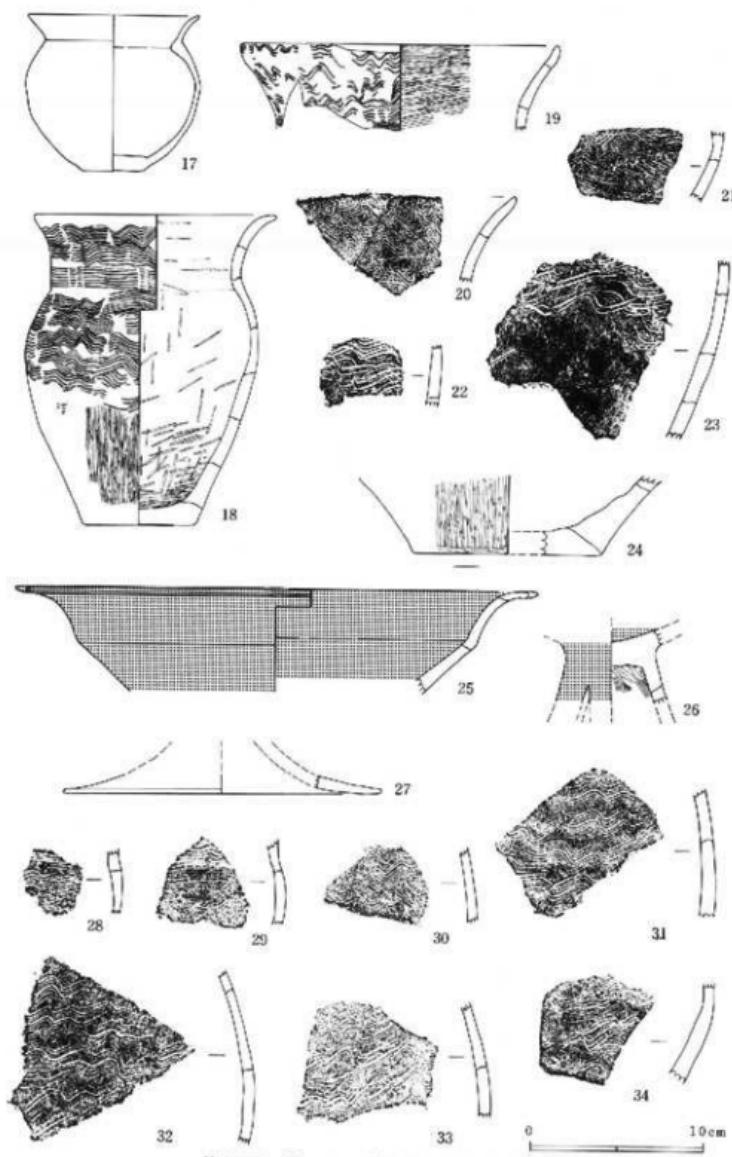
#### 遺構外出土の遺物（第30図49～54）

49はグリッドH-4出土の土師器の器台で、口辺部が稜を残して外反し、浅い器受部を持つと思われる。古墳時代初頭期から前期の所蔵と思われる。50は高さ1.5cmの大きく外反する足高台を持つ土師器の环でグリッドJ-3より出土した。足高台付环は本遺跡A地点等でも出土しており、本資料もほぼ同一の年代が与えられよう。51は10世紀中葉に比定される美濃窯生産の灰釉陶器の环であるが、高台部周囲を外側より丁寧に打ち欠いており、内面底部が滑らかで光沢を有していることから転用鏡として使用されたものと考えられる。同様の資料が本遺跡C地点からも出土しているが、D地点には同期の住居址が存在し注目される。52は中世陶器の甕で安定した高台を持つ。外面淡緑灰色、内面赤褐色を呈す。53は白磁の碗で、内面に同一製品の重ね焼の跡が残る。54はグリッドD-6より出土した粘板岩製の石包丁で完形品である。やや角ばった長円形を呈し、全周囲を鋭角に、両面を薄く研磨している。SK06出土品（第30図43）と同じく1孔を持

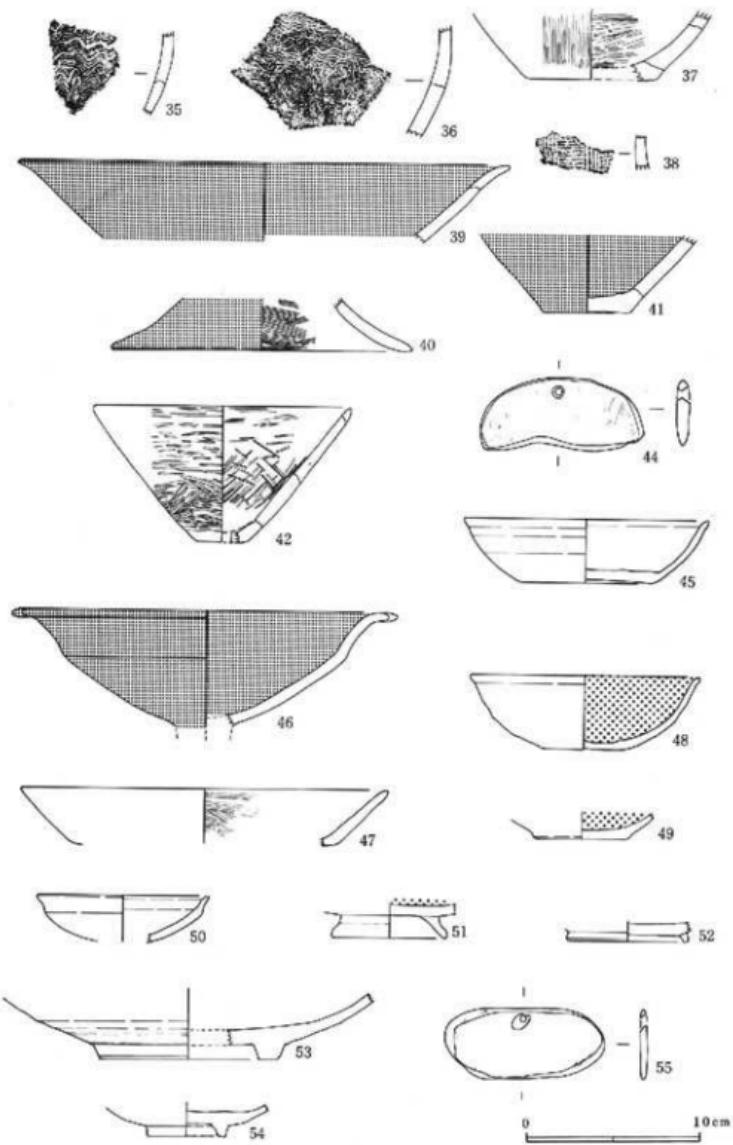
つが、刃部の磨滅は認められない。



第28図 墳ロノ一遺跡D地点出土の遺物



第29図 墓口ノ一遺跡D地点出土の遺物（2）



第30図 堆口ノ一遺跡D地点出土の遺物（3）

### 3 まとめ

堰口ノ一遺跡D地点の発掘調査で検出された遺構は、平安時代中期の住居址3軒、弥生時代後期、古墳時代前～中期、平安時代中期のはば3時期にわたる土塙14基である。

弥生時代の遺構の中で特に注目されるのがSK02である。胴張り隅丸長方形のしっかりしたプランを持ち、鍋底状の底部には粘土を貼り敲き締めて、礎の露出を隠している。出土遺物は小片が多いが、弥生時代後期～終末期の土塙墓と考えられよう。また、本地点からは2点の石包丁が出土しているが、塩田平では他に、北方1.5kmの和手遺跡で10点、北西方1kmの原田遺跡で1点の石包丁の出土が知られ、水稻栽培の定着がうかがわれる。本地点出土の2点はいずれも完形品で、今後の研究に好資料となろう。

平安時代の遺構はいずれも10cm程度の深さしか残存せず、遺物も多くはなかった。弥生・古墳時代の遺構がいずれも20～50cmも残存しているところから推察すると、古墳時代以降にある程度の堆積があり、平安時代の遺構構築後は逆に削平が進み、現在に至ったものと思われる。検出された3軒の住居址はプラン、遺物に微妙な違いをみせるが、9世紀後半から10世紀中葉にかけて、ほぼ連続して構築されたものと考えられる。同期の遺物はB・C地点で大量に出土しており、現手塚集落に重なって当時の集落が存在していたと考えられるが、具体的な住居址の検出は本地点が唯一の例で、堰口ノ一遺跡の立地を考える上からも重要であろう。

D地点で検出された遺構はSK02を除くと良好な状態ではなかったが、微高地の為、他地点とは異なった様相を呈し、堰口ノ一遺跡の立地や性格を検討する上で欠く事の出来ないものであろう。

### 第3節 西紺屋村遺跡の調査

西紺屋村遺跡は、西塙田小学校の南方、西紺屋村集落の北西に隣接して位置し、トレンチによる調査の結果、あまり多くはないが遺物の出土を見たので、遺物出土地点の周辺を拡張してグリッドを設定して調査を行った。その結果はあまりはかばかしくないと言わざるをえない。

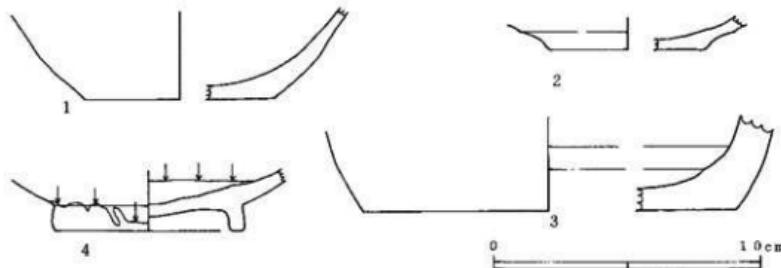
#### 1 調査日誌

- 8月5日（月）晴時々曇 表土除去作業  
9月1日（火）晴 " 遺構検出作業。  
9月2日（水）曇後晴 柱穴状ビットを検出。手塚公民館で土器洗い。注記作業を開始。  
9月6日（金）晴後雨 遺構検出、遺構堀り作業。  
9月9日（月）晴 遺構実測作業。  
9月10日（火）晴後雲 "

#### 2 検出された遺構

遺構と称することのできるものは検出されなかった。調査区域の南寄りにいくつかのビット状のものが見られ掘建柱建物址の存在が期待されたが、一定の規格をもち整然と並ぶこともなく、残念ながら性格不明のビットせざるをえないものである。

そのほかには何らの落ち込みも見ることができず、西紺屋村遺跡の中心部が現在の集落と重なっており、調査地点はその縁辺部にすぎないとみなす以外には考えようのない結果である。



第31図 西紺屋村遺跡出土遺物実測図

### 3 出土した遺物（第30図）

遺構の検出はなかったが、それでも少量の遺物が出土している。土師器・須恵器・灰釉陶器があり、全て破片のため図示できたものはその一部である。

#### ① 土師器（1）

壺破片である。胎土には細かい砂粒をやや多く含み、内面黒色研磨されているが風化が進み暗灰色を呈する。外面は橙褐色である。

#### ② 須恵器（2、3）

壺と甕のそれぞれ底部の破片である。壺は内外両灰色で回転糸切り底をもつ通有のもので、甕も一般的だが内面に自然輪がかかり暗灰色を呈し、部分的に白斑が見られる。

#### ③ 灰釉陶器（4）

安定した高台をもつ碗で、底部を除く内面と体部外面に薄い緑灰色の施釉がされている。

## 第4節 滝沢・金井遺跡の調査

### 調査日誌

9月3日 休晴 トレンチ設定、掘り下げ作業。

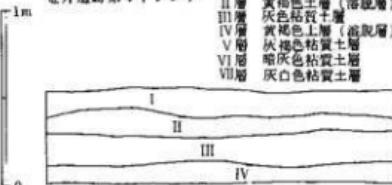
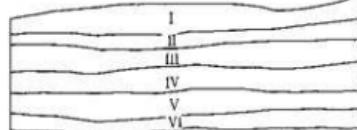
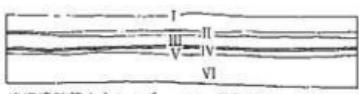
9月5日 休晴 トレンチ内実測作業。

9月4日 休晴 トレンチ掘り下げ作業。

9月6日 陰晴後雨 金井写真撮影。

滝沢遺跡は、大字手塚字滝沢に所在し、女神岳から流れ下る小さな沢（通称滝沢）が産川が形成した沖積台地に出る地点の北側に立地する。一帯は現在水田であり、かつて平安時代の土器を出土したとされている。一方、金井遺跡は字金井に所在し、女神岳の山麓に営まれている金井集落の裏手の畑地帯とその東側の水田地帯にあり、後期の弥生土器が耕作中に発見されている。また、金井集落の南の小高地には、昭和49年に発掘調査された後期古墳、皇子塚古墳がある。今回の調査は、弥生時代・平安時代に属する遺構や遺物のほかに、皇子塚古墳の存立にかかわるような古墳時代後期の遺構、遺物の発見が期待された。

あらかじめ何本ものトレンチにより遺物の包含や遺構の存在の有無を確認して、その結果調査地点を決定する予定であった。しかし、遺物包含層は認められず、遺構の存在も皆無であり、圃場整備事業対象区域内に遺跡の存在する可能性は低いと判断された。従って、本報告書にはトレンチ内の土層断面図を掲載して報告とする。



第32図 滝沢・金井遺跡トレンチ土層実測図

## 第4章 まとめ

これまで、今回の塙川西部地区圃場整備事業に先立って実施された五反田遺跡、堰口ノ一遺跡、西紺屋村遺跡、滝沢遺跡、金井遺跡の5遺跡の発掘調査について、その経過と結果を述べてきた。第三章において一つ一つの遺跡毎に簡単なまとめを付したが、ここではそれらに若干の考察を加えてまとめとしたい。

### 1

はじめに、5遺跡のグルーピングについて考えてみたい。何らの遺構、遺物の検出もなかった滝沢遺跡、金井遺跡は除外して、残る3遺跡について考えてみよう。調査の項でも述べたように、五反田遺跡と堰口ノ一遺跡は狭小な用水路をもって隔てられているだけである。名称の違いは所在する小字名の違いであって、立地的には一体の遺跡とすべきように見える。しかし、やや微細に見てみると一概にそう言い切ってしまうわけにいかない要素を認めざるをえない。つまり、堰口ノ一遺跡を中心にみてみると、9、10世紀頃の遺物を出土する地点が、出土量の多寡の差はあるものの、現在の集落と接する辺りから西へ北へと断続することなく広がり、調査した4地点は全て包摂して僅かではあっても字五反田にまで延びてきていることから、一体の遺跡とみなすことともできるわけだが、反対に五反田遺跡から見ると、縄文時代前期の土器は堰口ノ一遺跡の方へはあまり延びず、僅かにA地点まで見られるだけでB地点、C地点、D地点では全く見られないのである。すなわち、縄文時代が中心の五反田遺跡と平安時代が中心の堰口ノ一遺跡は、そのエリアの外縁で互いに重なり合うが、一体の遺跡とみなすべきではないだろう。

西紺屋村遺跡は、トレーナによる範囲確認の結果、北、西へは延びていないことがわかっている。すなわち、現在の西紺屋村の集落と重なって遺跡の中心部があり、今回の調査地点はその外縁部にすぎないとと思われる。しかし、隣接する東紺屋村も遺跡に重なって現集落が展開しており、東西紺屋村が同一自然堤防上に立地している点、同時期の遺物を出土する点などを考慮すれば、両遺跡は一体のものとしてよいだろう。なお、字東紺屋村と字堰口ノ一の間には宇立石があり、縄文時代中期中頃の土器や上部器、須恵器を出土する。

このようにみると、縄文時代や弥生時代の遺跡と重なったり接したりしながら、自然堤防上の平安時代中心の遺跡は産川に沿って間断なく連続と続いている。現在の集落のもとをなしたと言えよう。

### 2

さて、今回の調査の結果、特に多くの遺構、遺物が検出されたのはすでに述べたように五反田遺跡と堰口ノ一遺跡である。この2遺跡の遺構及び遺物について述べてみたい。

五反田遺跡からは多くの土壙が検出され、そのいくつかに伴って縄文時代の土器や石器が出されている。土器は全て小破片だが、第36号土壙(SK36)からはやまとまとめて出土している。そ

の特徴から、前期後葉の諸磯c式～晴ヶ峯式土器に併行するものとして位置づけることができるものである。北側に延ばしたトレンチからの出土は殆どなく、遺跡の主要部分は南側の西塙田小学校敷地の方にあるものの如くで、残念ながら住居址の検出はなかった。しかし、すぐ東に隣接する堰口ノ一遺跡A地点からほぼ同時期の住居址が1軒 (SB01) 検出されている。前述の如く、この地点は両遺跡が重複し合う地点で、五反田遺跡としては縁辺部に当たる。正円形プランを呈するこの住居址は、残念なことに真ん中をトレンチが通ってしまい、炉址を破壊してしまったようだが、その他の部分は良好に残存しており、破片ながら土器の出土も比較的多かった。埋藏文化財の多い塙田平ではあるが、縄文時代遺跡の調査は少なく、住居址の検出は検田見遺跡の中期のもの1軒にすぎず、前期住居址はこれが初例である。しかも、諸磯b～c式期の住居址は上小地方でもおそらくこれが初めてであり、その意味で貴重な発見となった。数多い土壙の性格は、しっかりと伴出遺物が少なく不整形のものが多いだけに不明と言わざるをえないが、正方形や橢円形のプランを呈し断面袋状のものや深いものは貯蔵穴とみなすことも可能である。

堰口ノ一遺跡からは、弥生時代後期、古墳時代前期、平安時代中後期（9、10世紀）に属する多くの遺物と、僅少ではあるが縄文時代中期土器や中世後期と思われる遺物が出土している。弥生時代後期の遺物は全て後葉の箱清水式期に属するもので、殆どがD地点にまとまっており、僅かにC地点からも出土した。堰口ノ一遺跡の内、今回の調査対象区域は周辺の土地に比べ全体に低いのに対し、D地点だけが高燥な地点で、弥生時代の集落が営まれるには恰好の場所である。しかし、検出されたのは土壙とそれに伴う遺物だけであった。甕、高环などの土器は該期の土器としてごく一般的なもので、とりたてて昔う程のものはない。けれども、2点出土した石包丁は、いずれも1孔の直線刃半月形態を呈する中部地方に一般的なもののだが、後背湿地とは言っても産川から取水しないかぎり開田不可能と思われる乏水地帯から出土した点で意義深い。すなわち、弥生時代後期後葉にはこの一帯で用水路を開鑿して稻作がおこなわれていた証左となるからである。また、C地点出土の弥生土器は全器形の判明するではなく、しかも量的に多くはないが、施文の特徴などから終末期に位置づけられるもので、伴出している古墳時代前期の土器との関係も含めて興味ある遺物である。北方1.5kmの和手遺跡は、弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡で、弥生時代遺跡としては塙田平でも最大規模のものだが、特にその終末期の甕に特徴があり最近では“上田型”との呼び方も始めている。東海地方や北陸地方からの影響を受け、箱清水式文化が内部から変容を始めて、その現象が先ず煮沸形態の土器である甕に現れたものと理解されている。つまり、弥生土器から土師器への過渡的な要素と様相をもった土器であるわけだが、当遺跡の土器もまさにそのような土器として把握してよいものと思われる。なお、この時期の遺構としては土壙が検出されたにすぎない。そのうえプランの不明瞭なものが多く、性格について言及するのは困難だが、D地点の第2号土壙 (SB02) は削張り隅丸長方形で鍋底状を呈するしっかりしたもので、その規模などから土壙墓としてよいと思われる。

古墳時代の遺物は、C地点及びD地点から出土しており、前期に属する土師器があげられる。なかでもC地点出土の土師器は最古式の様相をもち、伴出の弥生時代終末期土器と時期的に直接

連続するものであろう。なかでも壺は、口縁部を欠くが、外側全面と内面の頸部まで赤色塗装しており、土師器の器形と弥生土器の装飾をもつものである。これらは前述の弥生時代終末器の土器との関連で捉えなければならないものであろう。両地点とも遺構についてはあまりはっきりしないのが実情である。

奈良時代から平安時代前期にかけての遺物は少ない。僅かに須恵器环に底部ヘラ切りヘラ削りのものが認められ、この時期に比定できるが、遺構に伴わず、また他の遺物との併存関係も不明なので、全体としては明確でないと言わざるをえない。

平安時代中期から後期にかけての遺構としては、竪穴式住居址3、掘建柱建物址3、溝址3のほか土壙、ピットなどがあり、これらに伴う遺物は膨大なものがある。竪穴式住居址は3軒ともD地点で検出され、隅丸方形のごく普通のものである。掘建柱建物址は全体検出には至らなかつたが、柱間が唐尺（1尺=30cm）の5～9尺まで数通り認められ、同一建物のなかでもこのいくつかが使われており、一定しないところは何を示すのか不明である。溝址のうち、C地点において検出された第1号溝址（SD01）は幅20～35cmの小規模のものだが、明らかに水の流れた痕跡の残る水路である。これに平行するかのようにピットがあり、そのうちのいくつか（P1～7）は150cm（5尺）間隔で整然と並ぶものが多い。その状態はあたかも片屋根ながら溝に上岸を架構したか堀を設けるかの如くである。また、第3、4号土壙（SK03、04）は溝に接して設けられたもので水溜の施設と考えられるが、如何なる目的で設けられたものかは明確でない。土壙は多くが検出された。それらのもつ性格はさまざまに考えられるが、そのうちの特に重要と思われる2基について考えてみよう。先ずA地点で検出された第25号土壙（SK25）は多量の遺物を出土した。それらはセットとして捉えられるもので、土師器の壺（大、小）、羽釜、环、器台（鍋敷状）、灰釉陶器の長頸瓶で組成され、須恵器は含まれていない。詳細については前述したので触れないが、土師器と灰釉陶器のみによるセットである点、丈の高い高台（足高高台）をもつ环が含まれている点、壺と羽釜が併存する点などでかなり限定した年代を与えることができ、美濃窯の大原2号窯式に比定される灰釉陶器長頸瓶は、産地の研究者により10世紀後半という年代が与えられている。この年代は、当地方においてこれまでに蓄積されてきた足高高台付环の年代とはやや異なり、半世紀程古いものである。このことは、当地方における足高高台付环の編年がその地域での資料のみをもとに研究されてきて、長野県を超える範囲での他の資料との相關関係に基づく編年研究がされず、狭い地域における相対的年代が考えられてただけで、絶対年代が与えられなかったことを物語っている。しかしこれには、この土器が注目され始めたのが最近であること、セットで捉えられる資料が少なく、従って他の資料との関係から年代を割り出すことができにくかったことなどの理由がある。その意味で、この一括資料は今後の足高高台付环を含む土器の研究、特にその編年研究には欠くことのできない絶好の資料と言える貴重なものである。この土壙がなぜこのようなセットをもっていたのか、その機能としては、土壙の形状及び遺物の出土状況から推測すると、一通りのものを一括して埋納したものと考えることができよう。もう一つの注目すべき土壙は、C地点で検出された第1号土壙（SK01）である。完形に近い灰釉陶器長頸瓶を出土した

ことと、底に黄白色粘土を敷き詰めていたことからその性格について注意を引いた。灰釉陶器長頸瓶は約45度傾いて出土したが、底部は黄白色粘土の中に入っている、すぐ脇には偏平な石が据えられていた。本来は瓶は正立していたものであり、何か祭祀的な目的で設置されたものと理解すべきであろう。なお、この灰釉陶器長頸瓶は、美濃窯光ヶ丘1号窯式のもので10世紀前半の年代が与えられた。

このほかにもいくつかの遺構が検出され、多くの遺物が出土しているが、遺構については各地点毎のまとめで触れていることと、性格の明確でないものが多いことから省略して、遺物について少し述べておこう。非常に多く出土している遺物のなかで、特に目立つ多いのは土師器、須恵器、灰釉陶器の壺である。土師器、須恵器の壺は、土師器壺のなかに足高高台付壺やそれに近い高い高台をもつものがいくつか認められる点がやや注意されるくらいで、そのほかにはとりたてて挙げるべきことはなく、該期の一般的な土器である。なかに、底部に刻書のある土器、いわゆる刻書土器が2点出土している。「根」「長」と判読できそうな文字だが、もしそうだとしてもそれが如何なる意味をもつのか詳からでない。一方、灰釉陶器碗も当地方で出土するものの範囲を出るものではない。しかし、量的にやや多い点と、前述の上塙出土の瓶とともに限定された年代、すなわち美濃窯の光ヶ丘1号窯式期から大原2号窯式期の生産にかかるもので、猿投編年では黒雀90号窯式期（K-90）から折戸53号窯式期（O-53）にあたる10世紀前半から後半が与えられる点で、当地方における今後の灰釉陶器研究のメルクマールとなりうるものとして評価できる。なお、この灰釉陶器碗のなかに、転用碗が2点見つかっている。欠損した碗の体部を更に打ち欠いて底部だけを残したもので、底部内面（窓の跡）は円滑になっており、かなり使用されたことを物語っている。当時の地方における碗の使用について興味ある例になろう。

中世の遺構は検出されなかった。遺物も内耳土器、陶磁器、古鏡などが僅かに出土したにすぎない。しかし、古代以来の集落が継続して営まれていたことを物語ってはいる。

## あとがき

塩田西部地区県営圃場整備事業の実施に当たり、これにともなう埋蔵文化財の発掘調査は、遺跡も多く、調査面積もかなり広くあるので、実際調査がどのようになるのか、見当がつかず心配していた。夏休みという時期は発掘調査のシーズンである。あっちでも、こっちでもと各地でこの時期を利用して調査を開始する。このため、考古学研究者や発掘調査の経験者はどこかの調査地でも引張りだこで、早いうちから契約済みとなり、あてにしていた人の参加が得られなくなってしまう。

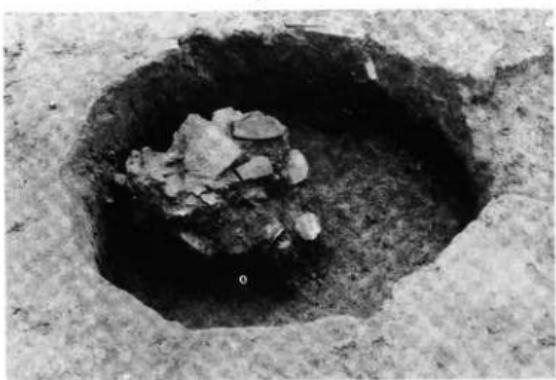
市教委の奔走にもかかわらず、経験者僅か二人に過ぎず、しかも調査期間中終始参加が望めない実情であった。幸いこの内部事情に深く理解を示してくれた塩人副團長を初め、事務局と手塚部落のこの仕事の責任者の原田晴章さん、池田五郎さんは、仕事がはかかるよう常に苦慮され献身的にとび歩いていただいた。作業がきついので、若い大学生を常時参加するよう計ったり、地域の人でも継続して出席できるような人を心配したり、一日たりとも絶えることのないよう出勤割当をしたりしてくれた。また事務局の教育委員会も、市職員の中からも調査経験のある者に出向を仰ぐような計らいをしてくれた。

調査は7月下旬から始まったが、8月中旬までは、酷暑が続き、強い粘土質で堅い土壤の発掘作業、8月下旬から9月にかけては雨の日が多く、ぬかるみの作業で困難な状況にいくつか遭遇した。これらを克服して無事予定の調査が終了でき、いくつかの成果をあげ得たことは、調査員を初め関係者一堂深く喜びとするところであり、協力の賜と感謝する次第である。(岩佐今朝人)

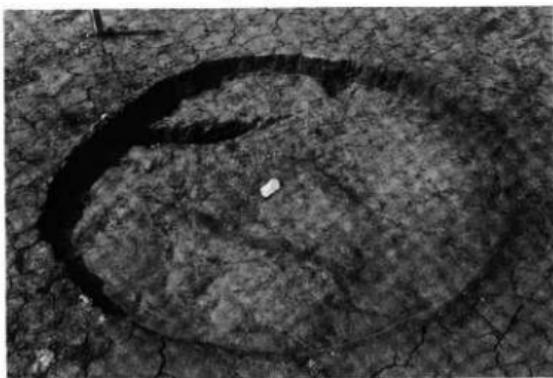
図

版

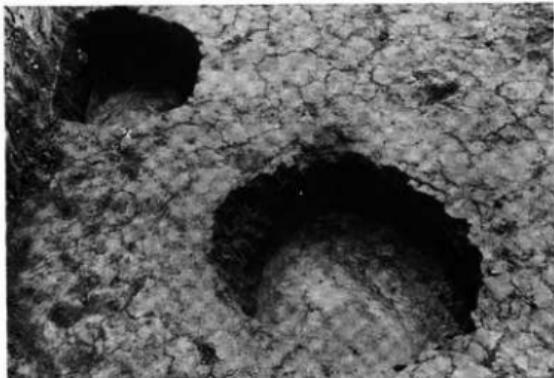




第38号土壤



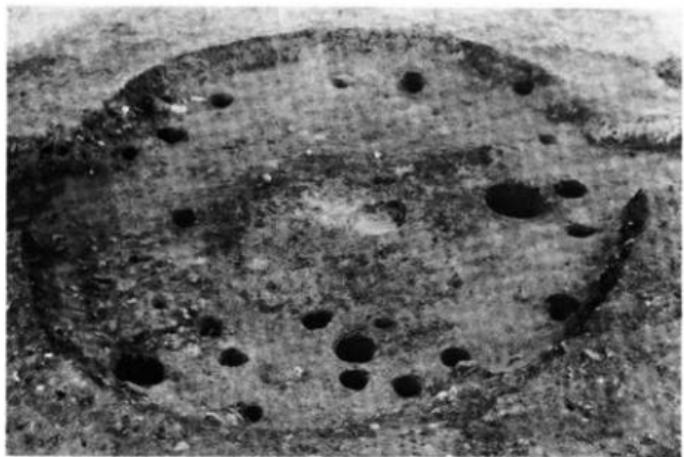
第34号土壤



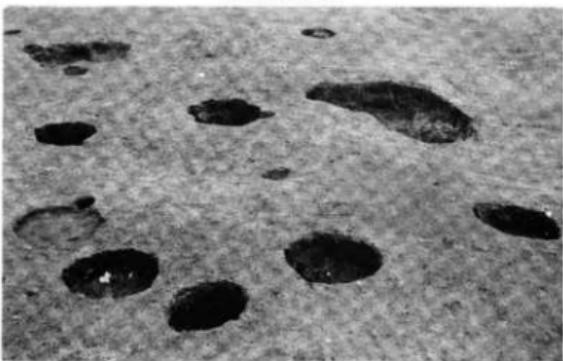
第36 . 37号土壤



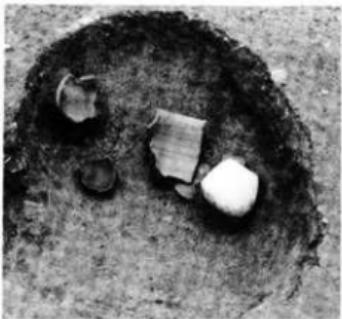
全景（南より）



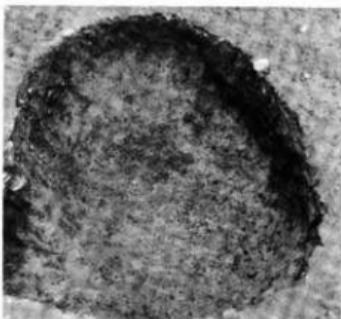
第1号住居址



第1号掘建柱建物址



第25号土壌遺物出土状況



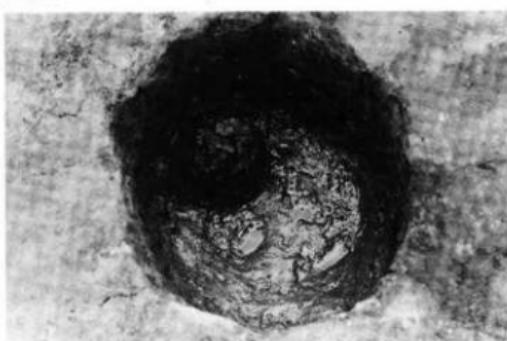
第25号土壤完掘状況



第8号土壤碇板検出状況



第1号掘建柱建物址



第1号掘建柱建物址  
P-1柱根検出状況



全景（東南より）



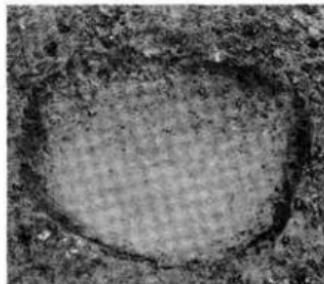
第1号溝址全景



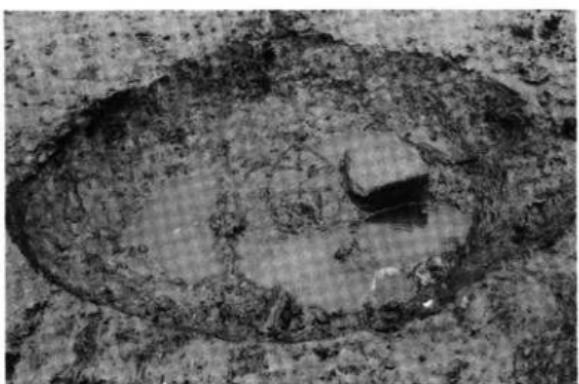
第1号竪穴遺構、第1号集石遺構



第1号土壙灰釉陶器長頸瓶出土状況



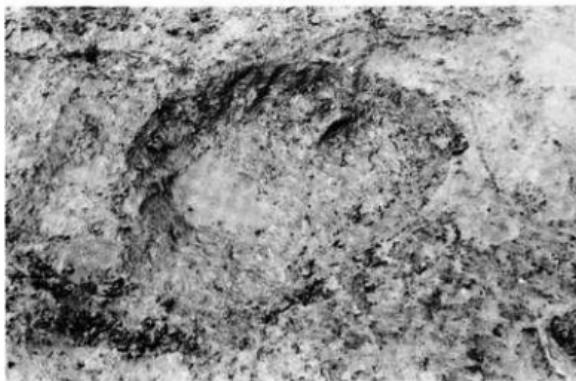
第1号土壙完掘状況



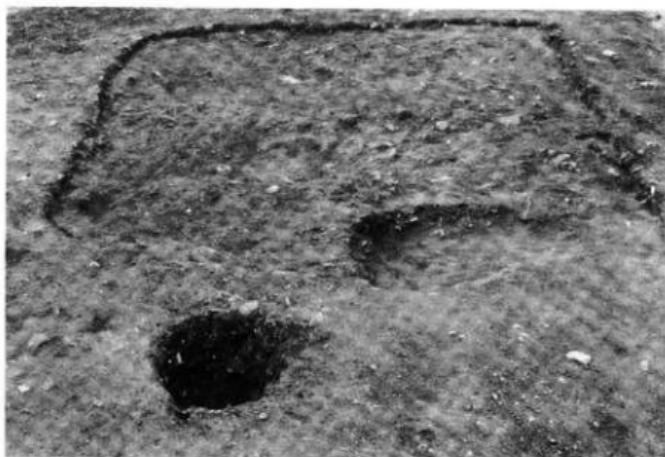
第12号土壤完堀状況



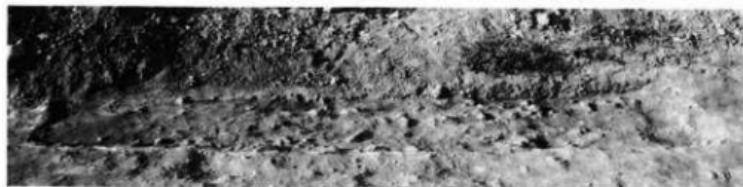
第13号土器遺物出土状況



第13号土壤完堀状況



第1号住居址、第1号土塁



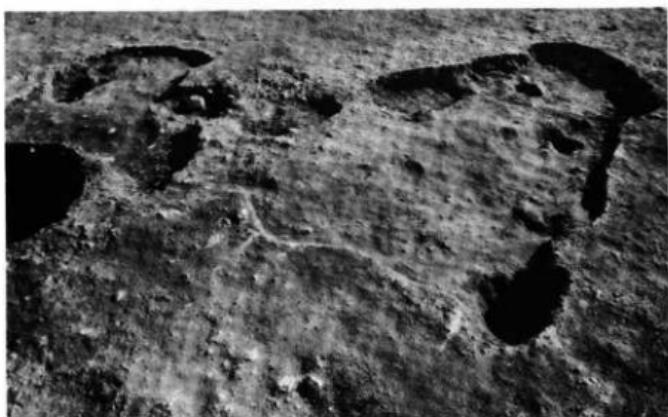
第2号住居址



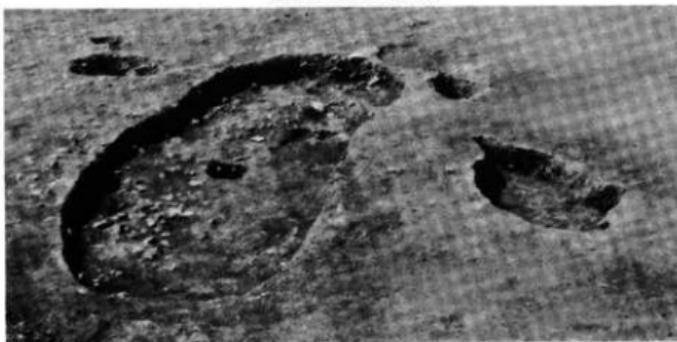
第3号住居址



第2号土壤



第3.4.12.13号土壤



第5.6.8.9.11号土壤



第2号土壤遺物出土状況

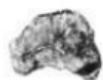


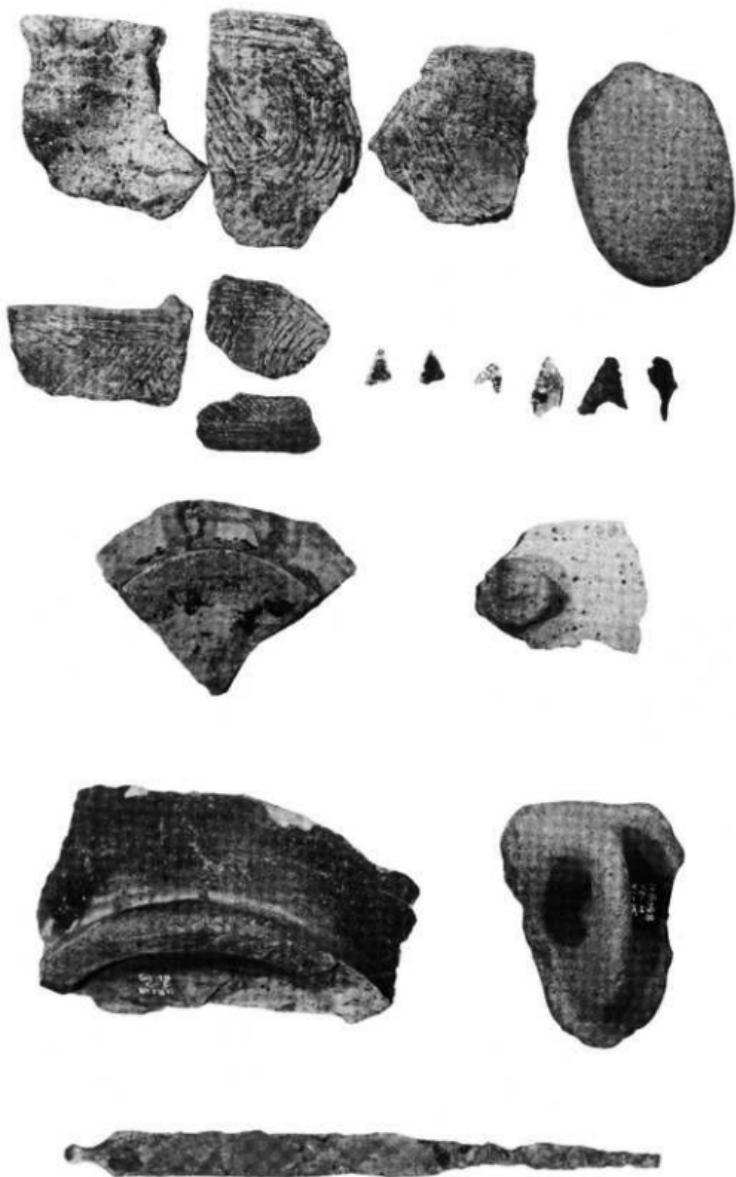
第6号土壤石孢丁出土状況



第12号土壤高杯出土状況





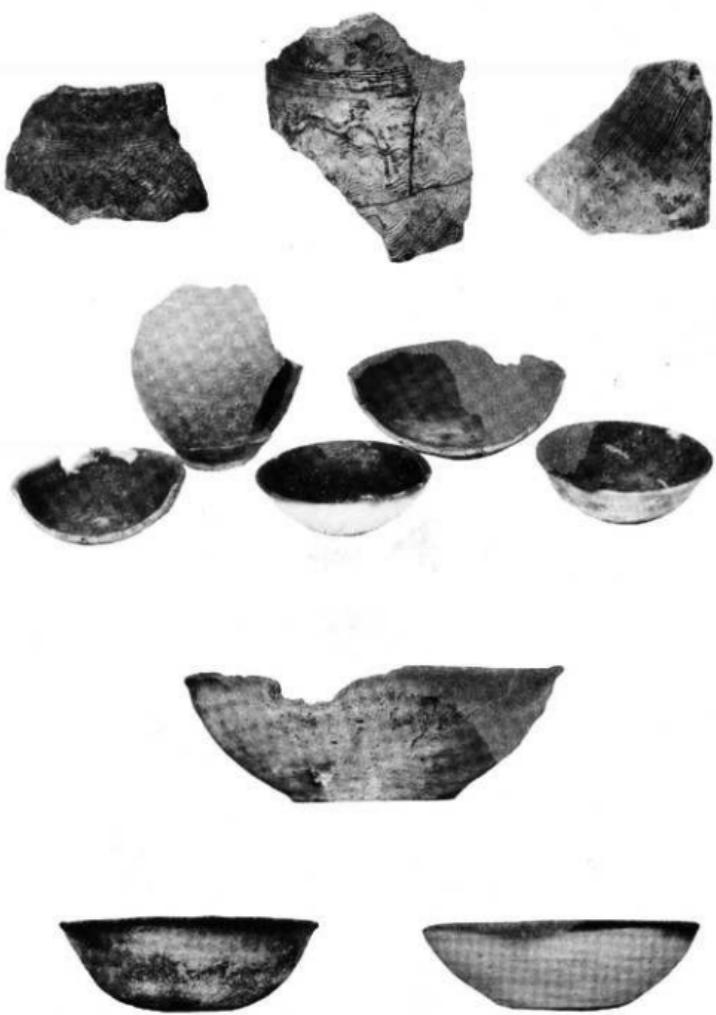






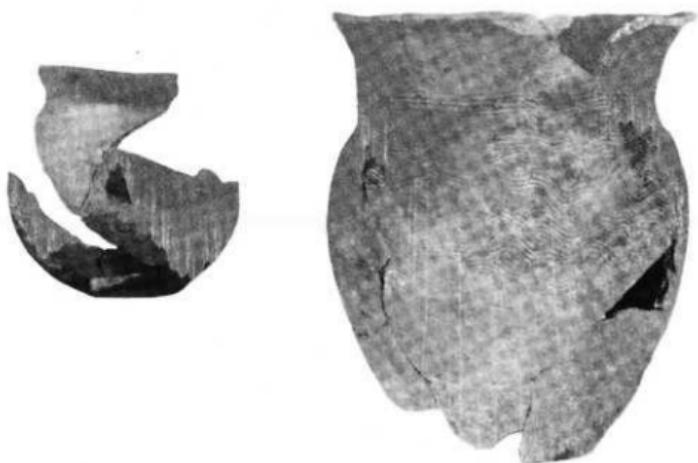


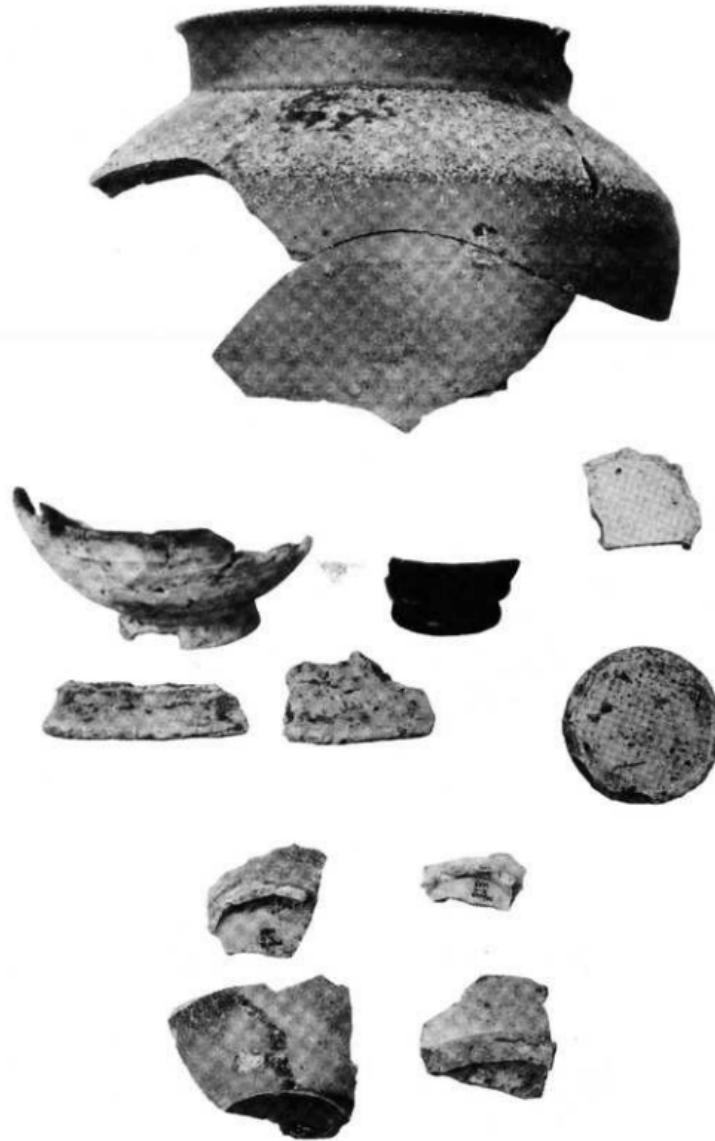
第17図版 堤口ノ一遺跡C地点出土遺物



第18図版 堤口ノ一遺跡C地点出土遺物







---

上田市文化財調査報告書 第26集

## 五反田遺跡

五反田遺跡他遺跡緊急発掘調査報告書

発行 1986年3月31日

上田市教育委員会

印刷 上田印刷株式会社

---